

災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2017

集める・伝える・活かす

目次

開会のあいさつ	1
報告会	
兵庫県立舞子高等学校	2
国立明石工業高等専門学校D-PR0135°（明石高専防災団）2年生チーム ...	5
国立明石工業高等専門学校D-PR0135°（明石高専防災団）3年生チーム ...	8
関西大学社会安全学部近藤研究室「ぼうさいマイCREDO」 ...	12
神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ	16
兵庫県立大学「ほっとKOBE」	20
立命館大学「減災×学びプロジェクト」	24
公開サロン	28
閉会のあいさつ	41
新聞記事	42
チラシ	43
委員・学生名簿	45
交流会・発表風景等	47

災害メモリアルアクション KOBE ACTION2017 「神戸のことば」

日 時：平成29年1月7日
開会 午前10時00分



開会のあいさつ



牧委員長

災害メモリアルアクションKOBの企画委員長を務めさせていただいている京都大学防災研究所の牧です。

今年の1月の17日で阪神・淡路大震災の発生から22年になります。22年という年を理解するために、皆さん、まず自分の歳から22を引いてみてください。私は、現在49歳ですので、当時27歳でした。また、私は、1945年の終戦から22年後に生まれました。そのため、もちろん戦争の経験はありませんが、近所のおじいちゃんとかおばあちゃん、それからお父さん、お母さんが話してくれる内容がどうも実感がなくて、何か戦争をしてはいけないということだけを何となく自分の心に刻んできたような、22年だったように私は理解しています。

この災害「メモリアルアクションKOB」は、22年前の阪神・淡路大震災の年から脈々と、続いています。まず一番初めは「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」という名称で、さまざまな分野で災害の復興に対する取り組みが続けられる中で、お互いの取り組みを知るために話し合っ

て情報交換をしようという目的のもと、発災翌年から2005年までの10年間、これが続けられました。その次の10年間にあたる2015年までは、今度は、「災害メモリアルKOB」と名称を変えて取り組んできました。その際、何を目標にしたのかというと、時間の経過とともにその教訓が次の世代になかなか引き継いでいけないという問題意識から、災害の経験をどう語り継いでいくのかということと併せ、他の地域にどうやって伝えていくのかということテーマに活動を続けてまいりました。

昨年度からは、「災害メモリアルアクションKOB」として、いかに次の災害を減らすために、私たちの経験をどうつないでいくのか、ほかに伝えて被害を減らしていくのかということテーマに新たに10年先を見据えた取り組みが開始されました。今年も4月には熊本地震、8月には台風10号の影響で岩手県や北海道で大きな被害が出ました。また、10月には鳥取県中部地震が発生しました。昨年の参加団体には、すばらしい発表をしていただいたのですが、それにとどまることなくもっと頑張っているということで、パンフレットにも掲載いたしました「神戸のことば」を今後10年間のメインテーマにしていこうと決めました。「神戸のことば」を以て、この神戸で取り組むことの意味は、あの震災の経験をした方々や、その後の復興で御活躍された方々が皆さんまだお元気でいられて、若い人たちはその話を直接聞くことができるという素晴らしい場所という利点がこの神戸にはあります。そういった実際に災害を経験した方のお話を自分たちの言葉に翻訳をしたうえで、それを他の方々に伝えていただきたいと思います。今日はどうぞよろしくお願いいたします。



災害メモリアルアクションKOBÉ ～ACTION2017～ 兵庫県立舞子高等学校

目的： 災害時、その人にとってベストな選択をとって後悔しないほしい。

兵庫県立舞子高等学校の紹介

昨年度に引き続き、今年度も環境防災科の各学年の生徒10名が参加させていただいています。
“高校生の私たちだからこそ”できることを、考え活動してきました。



出前授業後にたくさんの反省点が見つかりました。それをいくつか紹介します。

【準備に関する反省】

- ・準備を始める時間が遅かった。
→リハーサルを通してできていなかった。
- ・ワークショップのルールが曖昧な点が多かった。
→学校の校区や土地を把握できていなかった。
時間が余った場合の対処を考えてなかった。

【出前授業当日の反省】

- ・黒板の使い方が上手いかなかった。
- ・ワークショップに突然飛んだ。
→知識不足のままで授業を進めてしまったのではないかな。

まとめ

昨年よりスムーズに活動を行うことが出来ました。アウトプットを初めて行い、“聞いた事をどう活かして伝えるか”が難しかったので、反省を活かして来年に繋げたいです。

垂水ヒアリング（9/11・24）

JR垂水駅付近で行いました。2日間合わせて31名のお話を聞くことができました。震災当時のお話と防災意識調査を実施したことで、“津波に対する危機感を持っている方が少ない”ということがわかりました。



ご協力ありがとうございました

新長田ヒアリング(9/19)

新長田にある真陽地区で行いました。現在行っている活動や、震災当時大きな被害を受けた新長田では、「知ることで災害時の対応が変わる」とお聞きしました。

反省
まとめ

インプット
ヒアリング
(9月に3回)

アウトプット
出前授業(12/9)

授業の流れ

舞子チームの説明
↓
クイズ(2問)
↓
ワークショップ
↓
考えた避難経路を各班ごとに発表
↓
まとめ

ワークショップ

南海トラフ地震を想定して、中学生と実際にマップを使って、津波が来た時の避難経路を考えました。アクションカードを提示して様々な場面を想像し、判断して避難経路を考えました。

アクションカードとは
避難経路を考えてもらっている途中のあるタイミングで提示する、困っているおばあちゃん、倒壊している家、火災、迷子の子ども、水道管破裂、人混みなどをイラストで表したカードです。



考えた避難経路を発表している様子↑

■**兵庫県立舞子高校1** 私たちは災害時、その人にとって後悔しないように最善の選択をとってほしいという目的を持って活動しています。

今年の活動内容としてはインプット方法として「神戸のことば」を私たちが知るためにヒアリング調査を行いました。アウトプット方法としては、次の災害に向けて取り入れた「神戸のことば」を伝えたいということで、出前授業を行いました。

■**兵庫県立舞子高校2** まず、自分たちが「神戸のことば」を知らないの、「神戸のことば」を知るためにJRの垂水駅と新長田駅でヒアリング調査を行いました。

そこで分かったことは、阪神・淡路大震災のときの被害の差で防災に対する関心が違うので、それを知っていると知らないのでは対応が変わるということでした。

「知らないことを知ることに変えよう」と思の出前授業をさせていただきました。

■**兵庫県立舞子高校3** 私たちはヒアリング調査として2つの質問をさせていただきました。阪神・淡路大震災のときどうでしたかという質問と、〇〇しておけばよかったと思うことはありますかという質問です。あえて時間やシチュエーションなどを曖昧にすることで、さまざまな「神戸のことば」を聞かせていただきました。

ミーティングを重ねる中で、私たちは「神戸のことば」とは一体何なのだろうと改めて考えました。

そこには、二つの「神戸のことば」があると考えました。一つ目はヒアリング調査で聞かせていただいた生の声、もう一つは生の声を聞いて私たちが感じたことです。それらを伝えたいと思いました。

■**兵庫県立舞子高校4** 私たち舞子チームは高校生だからこそ見える視点での防災教育がしたいと考えました。次の世代に災害について知ってもらいたい、ワークショップを通してその人にとって最善の判断をとってもらうようにきっかけづくりを行いたい、そう思い、アウトプット方法として出前授業という形をとり、行いました。

■**兵庫県立舞子高校5** 僕たちは2016年の12月9日に明石市立衣川中学校で出前授業をさせていただきました。これは、神戸新聞に出前授業の様子を報道していただいた写真です。出前授業の内容としては、まず初めに、地震のクイズ、津波のクイズをしてからワークショップに入りました。

■**兵庫県立舞子高校6** ワークショップでは、スライドにあるようにさまざまな想定をして、実際に避難する経路を考えてもらいました。具体的にどこに逃げたいか、どこまで逃げられたか、アクシデントカードにどう対応したかを考えてもらいました。

アクシデントカードというのは、実際に災害が発生したときに自分がその判断に迷ってしまうことを実際にカードにしてそれを提示することで、自分ならどう対応するということを考えてもらうためにつくりました。これはアクシデントカードの内容の一部です。この腰を痛めたおばあさんが道端にいるという内容で考え、この内容を生徒に考えてもらったところ、このように背負って避難所まで運ぶという優しい考えから、助けずに自分たちの命を大事に逃げるという考えまでいろいろな意見が出ました。

しかし、このアクシデントカードには正解、不正解があるわけではありません。私たちがこのような難しい問題を使用したのは、実際に災害が発生したときにどんなことが起きるかわからないということを知ってもらうためです。

■**兵庫県立舞子高校7** 今年度は昨年度に比べてメンバーの人数が増えたことや、ミーティング回数を増やしたことによってさまざまな意見が出ました。しかし、インプット方法やアウトプット方法でさまざまな意見が出過ぎたために、みんな一人一人の考えや思いが一つにまとまらず、ミーティングでまとめながら進行していくのがとても難しく、大変なところでもありました。

そのたびに自分たちが大切にしていることは何かとい





うところに戻って考え、またときには先輩である河田さんにアドバイスをもらうなどしてミーティングを進めて、インプット方法、アウトプット方法を聞きました。

インプット方法では垂水駅前と新長田駅前でのヒアリング調査、アウトプット方法では衣川中学校で出前授業をしたことで、舞子高校チームの私たちだけではなく、ヒアリング調査をさせていただいた方々やまた中学生の方々にも防災を考えてもらうきっかけや、阪神・淡路大震災のことについて知ってもらい、今後の災害に向けて今、自分たちはどんなことをしなければならないのかなどを考えるきっかけづくりができたと思います。

■**兵庫県立舞子高校8** 先ほどの避難経路を考えてもらうワークショップの点で説明に不十分があったので補足させていただきます。

ワークショップ自体は中学校のークラスでさせていただきました。ークラス、大体40人ぐらいのクラスです。一班ごと、一班6人ぐらいに分かれていただいて、その中学校の校区内の地図を配って、その地図上でどういった避難経路をとるか、どこに逃げようとするか、また最終的に例えば10分あればどこに逃げられるか、最終的にどこに逃げられたかということを話し合いました。



【出前事業】



今回は、2年目の活動となります。昨年度はヒアリング調査のみの活動となりました。昨年は僕たちが成果や知見を発信するところまで持っていけなかったという課題がありましたが、今年度は中学校での出前授業という一つの発信までたどり着くことができました。

僕たちが伝えられた、また伝えようとしたことは、また、ヒアリング調査で聞き取った、たくさんのことの中の一つだけです。知っているのと知らないのでは対応が違う、そのことだけを、最終的にそのことだけを伝えようとする出前授業、僕たちはそこに絞って出前授業を行いました。

そういった中で僕たちは、授業の中でより多くの情報を伝える難しさ、また、一つの授業だけでは完結しない、またこれからも何年も何年も続いていかなければいけない、継続することの大切さを知りました。

僕たち3年生は3人なのですが、また次の来年度の取り組みについて抱負を後輩に述べてもらおうと思います。

■**兵庫県立舞子高校9** 来年度はメモリアルアクションの活動とミーティングを計画的に行って、今年度の反省をしっかりと活かして頑張っていきたいと思っています。よろしくお願いします。



国立明石工業高等専門学校

D-PRO135°(明石高専防災団)2年生チーム

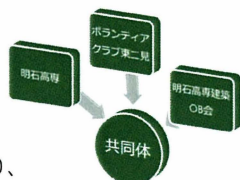


東二見地区減災プロジェクト

明石高専 D-PRO135°2年

プロジェクト概要

- ・明石高専 D-PRO135°
- ・ボランティアクラブ東二見
- ・明石高専建築OB会



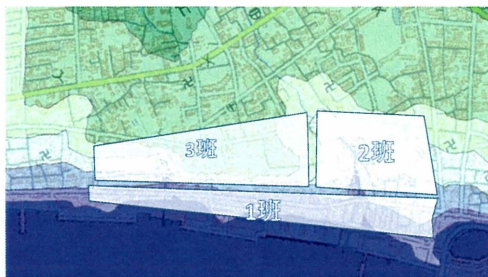
の3者による共同体が中心となり、
住民主体の減災まちづくり及び災害時要援護者の
避難対策等の検討を行うための取り組みを行う。

西乃町について

- ・古い町並みの残る風情ある漁師町
- ・高齢化、住宅の老朽化が進む
- ・特に西乃町は400件の民家が密集
→1/3が海に近い低地に所在
- ・災害時の要援護者対策が不届きである
- ・高低差が大きく、低いところは海拔2mにもなる



まち歩きWS in 西乃町



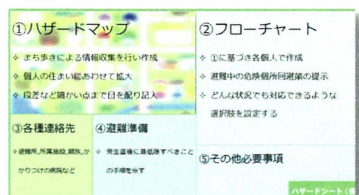
平成28年11月13日(日)
西乃町自治会、高年クラブ、はまなすの会、漁協組合
などから総勢32人が参加
3班に分かれ町の危険箇所点検・防災資源の調査

- 1班：築70年を超える家が多く、老朽化が進む
漁協関係の地区で70～80歳世代が集まる
東西の広い道◎
南北に続く道は急⇒避難時障害に
- 2班：情緒豊かな街並み⇒災害時危険
住宅が密集し地図にない道が多い
道が狭く災害時ふさがりやすい可能性が高い
⇒避難経路の提示は難しい
- 3班：別荘地のため敷地が広い
軽自動車1台は通行可能
南北に抜ける道が2本
⇒避難経路が少ない



私たちの提案

ハザードシートの作成
ハザードマップに基づくフローチャートを作成し
避難時の危険箇所回避案を提示



まち歩きを踏まえて

- 小学校まで自力で徒歩での避難は厳しい
- 災害時倒壊の危険性の高い道が多い
- 班ごとに特色が大きく違い一概に言えない



避難経路の提示は極めて困難

⇒各班・災害のレベルごとに対応を要する

これからの課題

- 一時避難所の調査・設置
- 1班地区の避難経路の調査（どこから北上する？）
- どこまで車が入れるか正確な調査
- 空き家の正確な所在数
- 災害後、方角の目印となるもの

今後の予定

- 東二見減災フォーラム・避難訓練
平成29年1月29日(日)
 - ・西乃町での避難訓練
 - ・炊き出しの実施
 - ・消火栓の使用練習
 - ・城戸史朗先生による基調講演 etc...
- ワールドカフェの開催
平成29年2月下旬
明石市内の他地域の皆さんと各々の減災取り組み
について話し合う

■国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 2年生1 2年生チーム代表の松田です。

私たちが取り組んでいる東二見地区減災プロジェクトについてお話しします。

このプロジェクトは私たちD-PROと東二見の方々によるボランティアクラブ、そして明石高専建築学科OBによる建築会の3者による共同体が中心となり、住民主催の減災まちづくり及び災害時の要援護者支援対策などの検討を行います。これはボランティアクラブの方々の防災に関する若いアイデアが欲しいという声から発足しました。

次に、東二見についてお話しさせていただきます。東二見は古い町並みの残る風情がある漁師町で、高齢化が進み、また住宅の老朽化が著しくなっています。特に、東二見の中でも西之町では400軒の民家が密集しており、そのうち3分の1が海に近い低地に所在しています。この東二見地区は明石市の中でも、災害時の要援護者対策が不完全であるところが多くあります。また、地形が特徴的で高低差が大きく、低いところは海拔2メートルにもなっています。

私たちはプロジェクトの一環として西之町において、まち歩きワークショップを行いました。平成28年11月13日に西之町自治会、高年クラブ、はまなすの会、漁協組合などから総勢32名の方々に参加していただき、私たちD-PROも建築会の方々とともにまち歩きを行いました。

地形の特徴に合わせて3班に分けて、町の危険箇所の点検や防災資源の調査など、よく知る町を改めて防災の視点から見つめ直してみようという活動を行いました。

まず、1班地区についてお話しいたします。1班地区は海沿いに広がる地区になります。築70年を超える家が多く、特に老朽化が進んでいました。また、漁協関係の地区で70歳から80歳世代が集まり、深いコミュニティが成り立っています。この地区は東西に広がる広い道がありますが、避難時に重要となる南北に続く道はとても

急となっており、高齢者にとっては避難時に障害となってしまう可能性があります。

次に、2班地区です。2班地区は情緒豊かな町並みがとても魅力的ですが、それは災害時に危険となってしまう可能性が大きいところが多かったです。住宅が密集しており、地図にない道や車が通ることができない道などが多くあり、道が狭いためブロック塀などの倒壊などにより塞がってしまう可能性が高いところが多かったです。このことより、避難経路の提示は難しいと思いました。

最後に3班地区です。この3班地区はもともと別荘地であることから敷地が広く、他の班に比べて軽自動車1台は通行可能というところが多かったです。この3班地区は東西に広がっているのに対し、南北に抜ける道が2本と、避難経路が少なくなっているという点が大きな問題でした。

さて、前回私たちはハザードシートの作成を提案しました。このハザードシートはハザードマップに基づく避難中の危険場所回避策を提示するフローチャート、その他に災害時に必要な最低限の情報が一目に見て分かるものを目標としてつくろうと思っていました。

しかし、前回のまち歩きを踏まえて、高齢者にとって急な坂が多いこの西之町では避難所である小学校まで自力で徒歩での避難は厳しいことや、災害時に倒壊してしまう危険性の高い道が多いこと、また、地域ごとに特色が大きく違い、避難経路の提案は一概に言えないことから、非常に困難であると判断しました。そこで、これから地域や災害の種類などに分けた対応をする必要があります。

これからの課題として、まず、一時避難所の調査と設置を考えました。この一時避難所は外部からの救助が来るまでの半日から1日の間避難できる駐車場や公民館など安全な場所を二、三十メートルの範囲に一つずつ設置し、まちの人と外部の防災団の方々との共通の認識を持って、なるべく避難するまでの距離を短くするために設置します。

次に、1班地区、この海沿いの東西に広がる地区の避難経路の設定、北上する道が少ないため、他の道を見つける必要があります。そして、どこまで車が入れるかの正確な調査、これは外部からの救助が来た際に、これがわからなければ、いきなり道が狭くなっているところが多いので、救助に時間がかかってしまう可能性があるもので、必要な情報となります。

そして、空き家の正確な所在数を課題にあげました。これは、まち歩きをした際にまちの方々と確認しましたが、気づかないうちに空き家になっていたり、長い間空



き家のまま放置されている危険な場所が多くあったため、正確な所在数を認識する必要があります。

そして、災害後、方角の目印となるものの設定です。これは古い民家が密集しているため、大きな災害の際に全てが潰れてしまう可能性があります。その後、せめて方角だけでも分かる必要があるので、倒壊の危険性が少なく目印となるものを設定する必要があります。

そして最後に、地域住民、特に若い世代の防災への意識の向上が必要です。これは現在このプロジェクトを行っていますが、プロジェクトの主体となっているのは高齢者が多く、若い力が欲しいという声が多くあるので、私たちが多くの若い世代を巻き込んでいくことが必要だと思われます。

最後に、今後の予定をお話させていただきます。

1月29日に東二見減災フォーラム及び避難訓練を予定しています。この避難訓練は私たちが計画案を提案させていただき、それに基づいた避難を行います。また、避難訓練以外にも炊き出しの実施や消火栓の使用練習、基調講演などを行います。

また、2月下旬には明石市内の他の地域の皆さんと、それぞれの減災に関する取り組みについて話し合うワールドカフェの開催も予定しています。

このプロジェクト期間は私たちが卒業するまで、つまり3年後までとしていて、今はまだ始まったばかりですが、地域の方々の意見を多く取り入れながら、また若い世代をもっともっと巻き込みながら、減災まちづくりを進めていきたいと思っています。



【交流事業】

国立明石工業高等専門学校

D-PRO135°(明石高専防災団)3年生チーム



D-PRO135°

明石高専防災団

「共助」を主体とした
防災ゲームを製作しました！

私たちの活動

About D-PRO135°

2015年度、明石高専の学生たちによって防災組織 D-PRO135°(明石高専防災団)が誕生しました。1年生での必修科目「防災リテラシー」にて、防災士資格を取得した学生たちの有志が集い、「防災知識の普及や校内での防災意識の向上に貢献したい」という思いで様々な活動に取り組んでいます。

新防災ゲームができるまで

The Process of Making

防災ボードゲームの原点「SECOND HAZARD」

昨年度、現3年生の初のプロジェクトとして、防災ボードゲーム「SECOND HAZARD(セカンドハザード)」を製作。阪神淡路大震災の被災者の方々へ行ったインタビューを基にゲームを開発し、試作品の体験イベントを開きました。イベント終了後にアンケートを取って改良を重ねていき、ついに2016年度、一つのゲームとして完成を迎えました。

より身近な防災ボードゲームを目指して

「SECOND HAZARD」の体験イベントではたくさんのご意見・ご感想をいただきました。そのなかで商品化や遠方からの貸出を求める声が多かったです。しかし、SECOND HAZARDはハード面的に量産ができないことや企業協力をしていただくか不確かなことから、たくさんの方々に遊んでいただくことが困難でした。そこで私たちは、各家庭でも遊べる新たな防災ボードゲームの開発を決断いたしました。

新たな防災ボードゲーム「RESQ」

新たな防災ボードゲームを開発するにあたって、SECOND HAZARDの長所を活かしつつ、ゲーム性や学習性をより向上させ、誰でも簡単に作れるようにしたいと考えました。ゲーム性・学習性においては、SECOND HAZARDのゲームボードやルールを一新し、より楽しくしっかりと学べるよう改善しました。また、たくさんの方々に遊んでいただけるよう、印刷さえすれば誰でも遊べるよう設計しました。そして、ゲームのデータをダウンロードできるD-PRO135°公式ホームページも作りました。ホームページについては、このポスターの一番下にQRコードを載せていますので、ぜひご覧ください。

このように、さまざまな要素を取り入れて新たに誕生した防災ボードゲーム。私たちはそのゲームを「RESQ(レスキュー)」と名付けました。

ゲームの概要

About the Game

「RESQ」という名前の由来

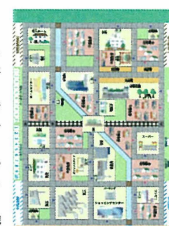
RESQの名前の由来には大きく3つの意味があります。1つ目はレスキュー「rescue」の救助、災害から人命を救う。2つ目は防災ゲームということで「quest」のQ、3つ目はきっかけの「cue」、災害を考えるきっかけを与える。これら3つの意味を掛け合わせて RESQ という名前になりました。

「共助」を主体とした新たなルール

RESQには前作のSECOND HAZARDにはなかった要素が、新たに多数盛り込まれました。最大の特徴はゲームの主体を「自助」から「共助」にしたことです。具体例としては「避難すること」が一つの目的だった自助に対し、共助は「助け合うこと」を一つの目的としています。したがって、ゲーム中に発生する人助けイベントをこなすことで勝敗を左右していきます。

「つくる、あそぶ、まなぶ」

RESQは3つの特徴から成り立っています。まず、「つくる」こと。ゲーム製作に必要な材料は紙のみなので、各家庭でゲームデータをダウンロードし、A4用紙に印刷したものを切り貼りして、自分たちで作ります。次に「あそぶ」こと。ゲームを選んで楽しみながら、災害を考えるあるいは、防災に興味を持っていただく。それがこのゲームのねらいです。最後に「まなぶ」こと。ゲームを遊ぶなかで、防災についてたくさん学ぶようになっていきます。防災クイズ、ミッションカード、ゲーム場に出てくる情報すべてが、災害時あなたを守る知識となります。



RESQ ゲームボードイメージ

つくる、あそぶ、まなぶ。

RESQ

ゲームの遊び方

How to Play the Game

ゲームの流れ

RESQでは人助けを「ミッション」として扱い、それをこなすことで「防災ポイント」という勝敗を分けるカギを集めています。また、ゲーム途中で出題される「防災クイズ」に挑戦することでポイントを集めることができます。

ミッションカードについて

ミッションには人助けや物資運搬などさまざまな種類が存在し、それに挑戦することによって防災ポイントが貰える仕組みになっています。貰える報酬はミッションの内容や難易度によって異なるため、プレイヤー同士の心遣いや報酬の争奪戦を楽しむようになっています。



防災グッズカードについて

プレイヤーはゲーム中、ゲームボード上の建物を訪れることによってこのカードを集めていきます。このカードはミッションで使ったり、ゲームを順位に進めることができ、ゲーム展開を大きく左右します。まさに「勝敗のカギを握るカード」です。



パーソナカードについて

このカードは、ミッション内で関わる要援護者や公務員といった人々を表しています。ミッションでこれらの人が関わる時に使用します。

防災クイズについて

About Quizzal Quiz

RESQのゲーム内で使っている「防災クイズ」について紹介していきます。今回、RESQでは防災に関する知識を3択形式のクイズにすることで気軽に学べるようにしました。クイズには私たちが防災リテラシーで学んだ内容はもちろんのこと、阪神淡路大震災の被災者の方々にしたインタビューや、神戸市のホームページに掲載されている「あの時設立した私の知恵」などを盛り込みました。また、解説では1問1問に詳しい理由や背景知識が説明されていて、クイズの正解不正解に関わらず防災時の行動を学ぶことができます。



防災クイズ出題イメージ

ゲーム中に防災クイズに取り組む際は、マップに記載されているQRコードを読み取ります。すると、インターネット上に作成されたクイズが出題されます。QRコードは1つですが、クイズは毎回ランダムで出題されます。こうすることで、常に新しく・正確な知識を学ぶことが可能となっています。



情報発信

Informations

HP

今年から新たにHPを開発。ゲームの詳細な情報などを掲載しています。RESQデータダウンロードはこちらへどうぞ。



Twitter

日々の活動やお知らせなどの内容を投稿しています。最も更新頻度が高いので、最新情報はこちらをご確認ください。



Facebook

基本的な投稿内容はTwitterと同じですが、写真や文章はこちらの方がより詳しいものになっております。



メンバー紹介

Members

現在メンバー20人(3年生13人、2年生7人)で活動中、それぞれの学生が持つ個性や能力を存分に活かし、日々楽しく活動に励んでいます。



太田敏一先生 東海翔 村岡志志
菅智子 橋原達也
中谷実穂子 松尾彰太 神足美友
木村真悠 松本拓実 今井美佑
松家雅大 渡部桂太郎 多田裕亮



Disaster - PRevention Organization 135°

■国立明石工業高等専門学校D-PRO135°(明石高専防災団) 3年生チーム1 明石高専機械工学科3年、渡部桂太郎です。

震災未経験世代にとって震災を実際に起こり得るものとして捉えるのは難しいことです。私自身もそうです。特に、小・中学生のころは、震災は自分の身に必ず降りかかるものと知ってはいるものの、無意識のうちに自分とは無縁のものと捉えていました。

しかし、それは仕方がないのかもしれませんが。なぜならば、単に震災を経験しておらず、震災は机上の話にすぎないからです。そのため、震災未経験世代、特に小・中学生はみずから意欲的に震災への備えや防災の勉強を行う人は多くはありません。そこで私たちは防災に興味がない震災未経験世代にも意欲的に防災を学んでもらう方法を考えました。それが防災ゲーム開発の始まりです。

昨年度の活動で、我々は一つの防災ゲームを開発しました。それがSECOND HAZARDです。しかし、SECOND HAZARDには様々な課題がありました。そこで今年度の活動では、それらの課題を改善し、SECOND HAZARDをベースとした新しいゲームを開発しました。本日はその新しいゲームについて三つの内容に分けてお話しします。

一つ目は新ゲームの内容について。二つ目は、先月小・中学生を対象に行ったゲームの体験会について。そして三つ目は、新ゲームの将来の目標について。新ゲーム、体験会、将来の目標の順でお話しします。

それでは一つ目の新ゲームについてお話しします。

昨年度開発したSECOND HAZARDには大きく分けて三つの課題がありました。一つ目は携帯性、二つ目はゲーム性、そして三つ目は学習性。ここにSECOND HAZARDがあります。しかし、持ち運びにくく、かさばります。また、ゲームにしてはおもしろみに欠け、教材にしては学べることが多くありません。もちろんSECOND HAZARDが失敗作だったわけではありませんが、この三つの項目全てにおいて我々が目指すレベルには達していませんでした。

しかし、本年度開発した新ゲームはこの三つの課題全てを改善しました。またルールも大幅に変更し、よりおもしろいゲームが完成しました。その名もRESQ (レスキュー) です。前作SECOND HAZARDと並べた画像も見てみます。写真を見る限りでは前作とほとんど同じように見えますが、それでは一体何が変わったのでしょうか。

それでは今から先ほどの三つの項目、携帯性、ゲーム性、学習性についてSECOND HAZARDとRESQをそれ

ぞれ比較していきます。

まず初めに携帯性について見ていきます。この箱の中にSECOND HAZARDで使うゲームボードとカードが全て入っています。しかし、ご覧のとおり、持ち運ぶには重過ぎ、また大き過ぎます。しかし、我々が目指すゲームはどこへでも持ち運べ、どこでも遊べるゲームです。

これが新ゲームRESQです。このクリアファイルの中にゲームで使うゲームボードとカードが全て入っています。これならかばんにも入ります。そして、どこへでも持ち運べ、どこでも遊べます。

それでは二つ目の内容に移ります。二つ目はゲーム性について見ていきます。SECOND HAZARDでは次々に発生する二次災害を乗り越え、ゴールの避難所を目指します。しかし、二次災害を乗り越えるというワンパターンな要素しかなく、時間がたつにつれ次第にマンネリ化していきます。それに対しRESQは何度遊んでもゲームがワンパターンにはなりません。RESQではミッション、次々に発生するミッションに取り組み、ミッション成功時に獲得するポイントの合計で勝敗を決めます。

ミッションとはどういうものでしょうか。一例を見てみます。これは足をけがしたおじいさんを病院へ運ぼうというものです。プレイヤーは防災グッズを駆使し、ミッション成功を目指します。ミッションには様々な種類があり、また、プレイヤーの状況によってもゲーム展開が変わります。つまり、ゲームがワンパターンにはならず、RESQは何度でも楽しめるゲームです。

最後に学習性について見ていきます。SECOND HAZARDは避難所を目指すいわば自助をテーマとしてゲームといえます。しかし、実際の災害時に多いのは自助よりも共助です。RESQではプレイヤーはミッション、つまり共助を体験できます。また、SECOND HAZARDでは神戸の知恵カードという形で「神戸のことば」をゲーム内に取り入れていました。しかし、ルールの特性上、そのカードの出現回数はどうしても低くなってしまいます。このままではより多くの「神戸のことば」をプレイヤーに伝えることができません。

そこでRESQでは防災クイズという形で「神戸のことば」をゲーム内に取り入れました。防災クイズとはどういうものでしょうか。これはRESQのゲームボードですが、左下にQRコードが掲載されています。少し拡大してみます。ゲーム中防災クイズに取り組むことになったプレイヤーは、このQRコードをスマートフォンで読み取ります。すると、三択クイズが出題されます。QRコードは一つですが、クイズはたくさんの種類の中から毎回ランダムに出題されます。防災クイズでは、阪神・淡路大震災

の被災者から実際に伺った内容や、神戸市のホームページに掲載されている神戸市が被災者に対して行ったアンケートの内容がクイズとして出題されます。また、「神戸のことば」以外の防災に関するクイズも含まれています。つまりRESQは遊ぶだけで防災の知識と「神戸のことば」が学べるゲームです。

ゲームについて何となくわかっていただけたかと思います。この発表の後、別の部屋でゲームの展示を行っていますので、興味がある方はぜひ一度ご覧ください。

それでは二つ目の内容に移ります。二つ目はゲームの体験会についてです。

先月12月18日、江井島小学校・中学校の皆さんに、実際にゲームで遊んでももらいました。また、遊んでもらった後、アンケートを実施しました。

それでは体験会の様子を見ていきます。ここは体験会の会場となった江井島小学校コミセンです。体験会には小学生18名、中学生17名の計35名が参加してくれました。こちらは小学生のグループです。皆さん、とても盛り上がっていました。こちらは中学生のグループです。和やかな雰囲気楽しんでいました。

さて、楽しくゲームで遊んでもらった後、アンケートを実施しました。それでは今からアンケートの集計結果を幾つか見ていきます。

まず、RESQはおもしろかったですかという質問に対し、5段階評価をしてもらいました。その結果がこちらです。アンケート結果で見ても多くの皆さんに楽しんでもらえたことがわかります。

次に、また遊んでみたいと思いましたかという質問に対し、同じように5段階評価をもらいました。その結果がこちらです。先ほどの質問に比べると、「とても思う」や「思う」の割合が減ったことがわかります。

今回の体験会では同じ学校の友達と一緒にゲームで

遊んだというもあり、多くの皆さんに楽しんでもらえたようですが、ルール自体は若干小・中学生には難しかったのかもしれません。

最後に自由記述を見ていきます。全部はお見せできませんが、多くの皆さんがゲームを通して防災に学べたと書いてくれました。

また、アンケートにはゲームの改善点を教えてくださいという項目もありました。その項目ではゲームのルール上の問題点を指摘してもらい、それはゲームの改善に役立てました。

最後に三つ目の内容に移ります。

三つ目はゲームの将来の目標についてです。先月江井島小学校で体験会を行ったように、我々D-PROが体験会を実施することによって近隣地域の皆さんにはゲームで遊んでもらえます。しかし、遠方地域では体験会を実施できず、そこにお住まいの皆さんにはゲームで遊んでもらえません。RESQは遊ぶだけで防災の知識と「神戸のことば」が学べるゲームなので、可能なら遠方地域の皆さん、日本中の皆さんにも手軽にゲームで遊んでもらいたいものです。それが将来の目標です。

それでは、どのようにすればこの目標を達成することができのでしょうか。この目標を達成するために解決すべき課題は三つあります。

まず、日本中どこに住んでいてもゲームが遊べること。そして、お金がかからない方が多くの皆さんに遊んでもらえるので、無料で遊べること。また、その方法が必ず実現が可能なこと。

最初に考えたのは商品化です。しかし、お金がかかってしまい、実現可能性も低いです。また、自主生産も考えましたが、これもやはり難しいです。それでは、どのようにすればこの三つの課題全てを解決できるのでしょうか。

結論を申しますと、ゲームで遊ぶ皆さん自身がゲーム



を製作すれば、三つの課題全てを解決できます。これはどのような方法でしょうか。皆さんがRESQで遊ぶまでの流れを見ていきます。

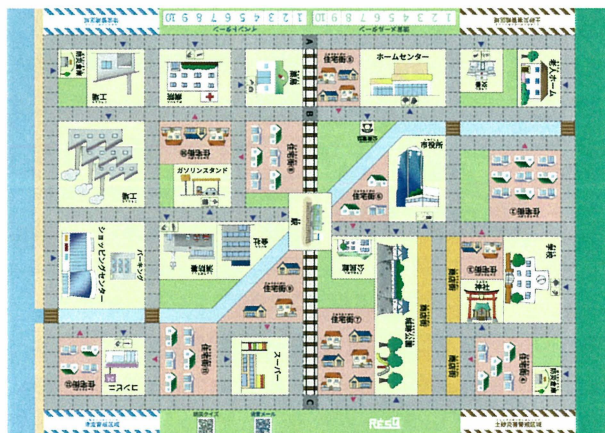
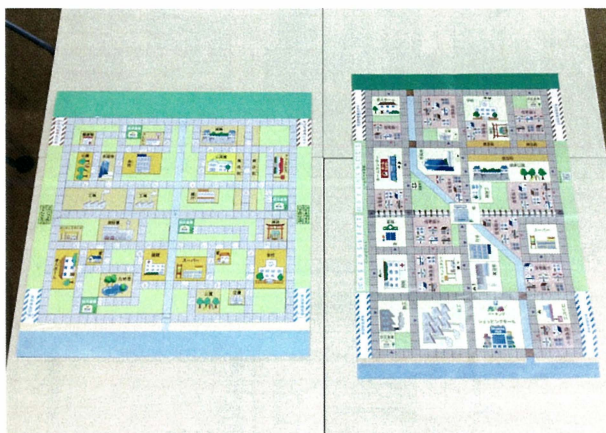
まず、ウェブ上に公開されたゲームボード、カードのデータをダウンロードします。次に、ダウンロードしたデータを印刷します。印刷は家庭用の印刷機でも可能です。そして、その印刷したゲームボードやカードを切り貼りし、ゲームを製作します。その後、ゲームで遊べます。

もう少し詳しく見ていきます。まず、ゲームの材料は印刷紙のみです。また、その印刷紙にゲームボードとカードを印刷し、ゲームを製作するため、制作費はほぼゼロ円です。また、SECOND HAZARDは1台製作するのに丸一日かかっていたのに対し、RESQは1台製作するのに2人で製作した場合、30分しかかかりません。これなら誰でも簡単に製作できそうです。もちろんウェブ上に公開されたデータは日本中どこからでもダウンロードできます。その方法を使えば、先ほどの三つの課題、場所問わず、無料、実現可能が、全て解決できます。そして、この

方法を実現するのが将来の目標です。

それでは、いつ、この方法は実現するでしょうか。いつから皆さんはRESQで遊べるでしょうか。実を言えば、これは将来の目標ではありません。もう既に実現しています。実はゲーム製作の裏でD-PROのホームページを制作していました。ゲームのデータはここからダウンロードできます。ホームページのURLは後で御紹介しますので、今日からRESQで遊べます。RESQに少しでも興味がある方はぜひ一度ホームページをごらんください。

最後に発表を振り返ります。本日は新ゲームRESQについてお話ししました。結局のところ、RESQはどのようなゲームでしょうか。まず、ホームページからデータをダウンロードし、ゲームで遊ぶ皆さん自身がゲームをつくります。次に、ゲームで遊びます。ただ遊ぶだけです。それにより防災について学べます。つくる、遊ぶ、学ぶ、これが防災ゲームRESQです。つくる、遊ぶ、学ぶ、皆さんもRESQを体験してみたいはいかがでしょうか。



【交流事業】



<https://D-PRO135.github.io/home/>

■ 関西大学社会安全学部近藤研究室「ぼうさいマイCREDO」1 関西大学社会安全学部4回生の尾崎杏奈です。「ぼうさいマイCREDO」小さな約束プロジェクトの2年目の成果を3回生の芥田慶祐君と一緒に報告したいと思います。

この「ぼうさいマイCREDO」とは何なのかについてまず説明をします。このCREDOと聞きなれない言葉ですが、これはラテン語で、約束や信条という意味を指します。この「ぼうさいマイCREDO」は防災に関して自分は何々しますというようなポジティブな宣言文をあえて言葉で表したものです。

幾つか例を挙げると、私は率先して津波避難を行います、忘れずに防災グッズをそろえておきます、などです。

この「ぼうさいマイCREDO」の取り組みは、現在関西の各地で行っています。本日はこの中で3カ所の紹介をします。

■ 関西大学社会安全学部近藤研究室「ぼうさいマイCREDO」2 3回生の芥田です。

私たちが活動している京都府京丹波町では、住民の皆さんの「ぼうさいマイCREDO」を、ケーブルテレビを通して放送するプロジェクトというものをまちの情報センターの方と共同して行っています。今日もこの会場には情報センターの方が来てくださっています。ありがとうございます。

取り組みは二つありまして、一つは防災意識を向上させるための特集番組づくり、もう一つは火の用心、つまり防火意識を高めるためのキャンペーンCMづくりです。

防火キャンペーンCMは昨年2月にスタートし、既に2,000回ほど放送しました。CMには既に300人を超える方が出演しています。住民の皆さんの前向きな思いを共有することによって、それをお互いの励みとし、防災、防火に取り組んでいただこうという狙いです。

実際にアンケート調査を行ったところ、番組やCMを多く見た人ほどそれを励みに感じてくださっていることが分かりました。そして、単に意識が変容するだけでなく、CREDOで宣言した防火対策を実行に移してくださった方も数多くいて、人口1万5,000人のこの町で、2月、4月、10月は火災が1件も発生しなかったというすばらしい実績を残すことができました。

■ 関西大学社会安全学部近藤研究室「ぼうさいマイCREDO」1 この「ぼうさいマイCREDO」ですが、原点はここ神戸にあります。昨年度の報告のリフレインになりますが、なぜこんなアプローチをとっているのか、おさらいしたいと思います。

メモリアルアクションKOBЕのテーマは「神戸のこと

ば」です。私たちもこの「神戸のことは」にこだわったアクションを行っていかうと考えました。しかし、震災後に生まれた私たちにとって、正直、阪神・淡路大震災は身近な出来事ではありませんでした。私自身、震災から1カ月後に大阪の高槻市で生まれ育ちました。そのため、この阪神・淡路大震災はやはり少し遠い出来事なのが正直なところでは。

そこで何度も神戸に足を運んで、この「神戸のことは」に耳を傾けてみることにしました。私たちが通ったのは神戸市長田区真陽小学校校区です。阪神・淡路大震災の際は住宅被害が激しかったとのこと。今はこの写真のとおり、長屋が軒を連ねていて、私たちから見ると下町情緒あふれる親しみやすそうなまちです。

内閣府の想定によれば、南海トラフ巨大地震によって最悪の場合、このまちの8割が浸水すると言われていました。阪神・淡路大震災の経験を踏まえて巨大災害に立ち向かうようなアグレッシブな言葉があふれているのかと思い、「神戸のことは」を真陽地区で聞き取ってみることにしました。すると、意外なことが分かりました。

これは真陽小学校の児童が描いた防災、災害のイメージです。家が燃えて人々が逃げ惑っているイラストが描かれています。添えられていた言葉を見ると、人が死ぬ、大変なことが起こるなどというネガティブな言葉ばかりで、中には全滅するといった言葉もありました。ポジティブな言葉、例えば助け合いだとか共助とかボランティアといったような言葉を書いた児童は一人もいませんでした。

では、一方大人たちの言葉はどのようなものだったでしょうか。昨年度の夏に戸別訪問調査を実施しました。すると、前の家には寝たきりの高齢者がいて、隣には80代のひとり暮らしの高齢者がいる。そして、我が家には車椅子に乗っている母がいる。もうどうしようもない。さらには、20年前は確かに助け合ったけれども、そこからみんな20歳年をとってしまった。だから、次、もし大きな地震、南海トラフ巨大地震が来たらもう無理だというような言葉が見受けられました。1軒、1軒、ピンポンとチャイムを鳴らしてアポなしで調査をしたのですが、正直、ここまで後ろ向きな言葉が多いのかと、私は驚きました。

そこで、次のような問題意識が芽生えました。阪神・淡路大震災の経験から、次の災害に立ち向かうための力となるようなそんな前向きな語りがあまりにも少ない。ネガティブな言葉が後ろ向きの機運ばかりを醸成してしまうネガティブ・スパイラルが起きているのではないだろうか。

ところで、こうした状況はここ神戸だけで起きている

わけではないようです。先行研究によれば、南海トラフ巨大地震で最大の津波が襲うとされている高知県黒潮町では、震前過疎といって、災害が起きる前に町を捨て、引っ越してしまう人が出ているそうです。また、兵庫県尼崎市では、高齢者たちが避難することを諦めてしまう、避難放棄という事態が報告されています。

まだ、災害が起きていないのにネガティブな言葉ばかりがあふれて、既に災害に負けてしまったかのようにになってしまうこの状況を何とか反転させたい。私たちは言葉の力を信じて新たなアクションを構想することにしました。

そこで生まれたのがこの「ぼうさいマイCREDO」です。もう一度定義を繰り返しますと、この「ぼうさいマイCREDO」は防災に対して自分は何々しますという宣言文の形で前向きな思いをあえて言葉にして表したものです。ネガティブな言葉、後ろを振り返る言葉がダメだというわけではなくて、ネガティブな思いも引き受けながら一緒に前を向いてみようというアクションです。

幾つか採取したCREDOを見ていただきます。例えばこんな感じです。

こちらは、丸五市場の鶏肉屋の御主人のCREDOです。津波が来たら2号線より北に逃げますと書いてくれました。スケッチブックとマジックペンを渡して、最初はげんなりした顔でいらっしゃったのですが、最後はこんなすてきな笑顔で自分のCREDOを掲げてくれました。

もう一枚、中華料理屋のおかみさんのCREDOです。逃げるが勝ちと、やはり笑顔でついてくれました。後ろに小さく写っているのはお客さんですが、この話を聞いて、最後には一緒に笑顔でピースをして写真を撮ることができました。

言葉はみんなと共有すると大きな力を持ちます。そこで、この「ぼうさいマイCREDO」をまちで共有する取

り組みを同時に進めることにしました。それはこちら、CREDOカレンダーの製作です。月めくりのカレンダーに仕立て上げて、本日、こちらに実物をお持ちいたしました。こちらのサイズの月めくりのカレンダーにしております、このように上半分にCREDOの写真を載せて、下に実際に予定が書き込めるような実用的なカレンダーにしました。このようなカレンダーの形にすることで、最低でも1カ月間はこのCREDOの写真を眺めてくれることができると思いました。

3月はひな祭りがあるので、この地元の真陽小学校の5年生の女の子たちのCREDOを載せました。幾つか抜粋しますと、泣いている子やパニックになった子を落ちつかせてあげる、ペットの世話をするなどという力強い言葉があります。

こちらは7月、商店街の女子会の皆さんのCREDOです。日ごろからのきずなが大事と書いてくださいました。スケッチブックではなくて、商店街のトレードマークであるハートの形をかたどった厚紙に一文字ずつ書いて掲げてくださいました。

こちらは11月、絵手紙サークルの皆さんのCREDOです。サークルの会合にお邪魔してCREDOを書いてくださるようお願いしたのですが、最初は断られました。しかし、書き始めてみると、皆さん2枚、3枚とイラスト入りで描いてくださいました。このイラストも相まってとてもすてきなCREDOだと思います。

このカレンダーを地区限定で500部製作して配付いたしました。

ここまでは昨年度のリフレインです。それで、結局どうなったのか、作っておいしい、よかったよかったという自己満足で終わらせるわけにはいきません。

そこで、様々な手法によって反響を調査しました。この調査では、手法を変えて5種類行いました。どの調査



からもこのCREDOが励みになったや、やってよかったという声が数多くあったのですが、今日はエッセンスとして真陽地区の婦人会の皆さんを対象としたグループインタビューの結果を御紹介します。

婦人会の皆さんにとって、この「ぼうさいマイCREDO」は今までの経験を再確認するいい機会になったようでした。そして、この方々から、これまで周りの多くの人から励まされてきたからこそ頑張ってくることができました。その結果として、今の神戸、新長田自身の生活があると思うんですよと教えてくれました。

ここが重要だと思います。励みになった言葉があって、励ましたい言葉が生まれる。この励まし合う関係性を婦人会の皆さんは、次の世代にもつないでいきたいとお考えのようでした。「ぼうさいマイCREDO」は励まし合う仕掛けとして機能する、そんなポテンシャルがありそうです。

■ 関西大学社会安全学部近藤研究室「ぼうさいマイCREDO」2 最後に「ぼうさいマイCREDO」のポテンシャルを生かした取り組みをもう一つだけ御紹介します。

滋賀県草津市ではCREDOを活用した地区防災計画づくりを行っています。それを僕たちが支援しています。

地区防災計画は住民全体で災害対応を計画しておくもので、オーソドックスな構成はスライドで示したような感じになっています。

しかし、草津市の山田学区ではこの計画文書に町内会長19人全員のCREDOを入れました。それがこちらになっています。

ここではスローガンとなっていますが、北山田町内会、身につけよう地域ぐるみの防災力、五条町内会、避難集合場所にそろそろ顔と顔、南山田町内会、町内を守ろう、訓練、訓練、また訓練、出屋敷町内会、住むまちをみんなで守る地域の輪、中には町内会でおそろいのジャンパー、ブルゾン、帽子をつくったりして町内会の防火意識、防災意識を高めていこうという方も見られました。

さらに、CREDOを音声でも録音しました。その録音したものがあるので、聞いていただきたいと思います。

(録音音声始まり)

「住むまちをみんなで守る地域の輪」これをスローガンにしております。当町は高齢者のひとり暮らしの世帯が12世帯ございます。また、高齢者のみの世帯が11世帯おられます。そういう中で日々の安全を確認するのが重要だと考えて、このスローガンにしました。

(録音音声終わり)

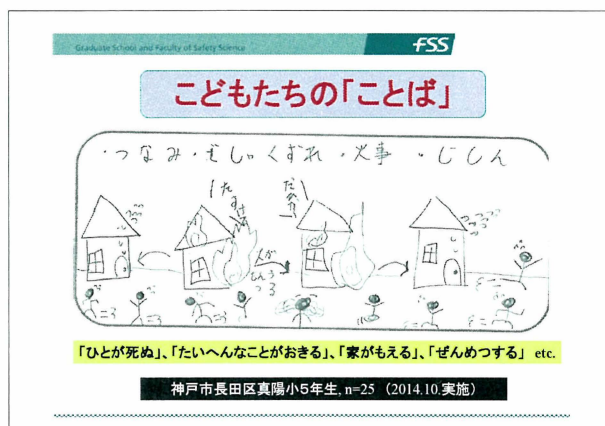


■ 関西大学社会安全学部近藤研究室「ぼうさいマイCREDO」2 さらにこれをコミュニティエフエムのラジオ放送で番組収録を行いました。明日、再放送があり、11日以降はインターネットを通じてオンデマンドでも配信される予定になっています。

「ぼうさいマイCREDO」は写真、動画、音声、テキスト、様々な形式で伝達することができます。この特性を生かして来年度は和歌山県広川町にある稲むらの火の館でCREDOを紹介する展示を手がけたいと思っています。

僕たちはこのようにして、励まし合う関係性を構築できるCREDOの力を信じて、来年度以降も取り組みの輪を広げていきたいと思っています。

もし御関心がありましたら、ぜひお声かけください。一緒に力を尽くしましょう。





災害メモリアルアクションKOBЕ 2016 「阪神淡路大震災の教訓って？」

神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ

3年 喜田悠太郎、沖代大知、田中瞳、木ノ下敦也
2年 和田貴士、菅原由衣、綾部勇太、富岡美祈、塚本真央子、大家元希、井上太賀、南木颯人、向田健司、仲上芽花、山村勇貴

港島学園

11月17日午後1時から45分間、神戸市中央区ポートアイランド内にある、市立港島学園で8年生（中学2年）10人に、学生14人でインタビュー調査しました。質問内容は、家具の固定をしているか、家族の人から阪神淡路大震災当時の話を聞いたことがあるか、など短い時間ながら、非常に興味深い話を聞くことができました。また、中学生と大学生が話す機会はなかなかないので、貴重な経験になりました。



水道筋商店街

私たち灘班（喜田、和田、富岡、塚本、大家、井上、仲上、山村）は、12月2日午前11時から神戸市灘区の水道筋商店街で、インタビューを行いました。商店街に買い物に来ていた人たちに、阪神淡路大震災当時の話や今に伝えたい教訓のお話を聞きました。避難所で苦労した話など11人の方に聞くことができました。

JR新長田駅周辺

私たち長田班（沖代、木ノ下、綾部、菅原、向田、南木）は、12月2日午前中に神戸市長田区のJR新長田駅周辺で、阪神淡路大震災当時の様子についてインタビューしました。約10人の方にインタビューを行い、震災時の様子、次世代に伝えたいことを聞きました。中には震災時のことを思い出したくない人や、語りたくない人もたくさん、おられました。今でもそのような思いが残るような悲慘な状況だったことがわかりました。



ラジオ関西「時間です！林編集長」に出演

11月17日と12月8日の2回、ラジオ関西の「時間です！林編集長」の午後3時15分から「これどうですか！編集長」のコーナーに、喜田、田中、沖代の3年生3人が出演。「災害メモリアルアクションKOBЕ 2016」への取り組みについて話しました。「震災を経験していない私たちが、次の世代の中学生たちに、どう教訓を伝えるのか？ 教訓って何？」と思いながら、中学生へのインタビューや震災体験者にお話を聞きました。教訓を伝えていくのってとても難しい」などと話し、ラジオのリスナーにも、伝え残したいことなどを聞き、多くの返信をいただきました。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ1

「本当に伝わる教訓って？」というタイトルでこれから発表します。神戸学院大学の安富ゼミです。

このテーマになった理由をまず説明します。これは、私が最初に言い出したことがきっかけで始まりました。震災を経験した人が私たちにたくさんの教訓やお話を聞かせてくれるその教訓と、私たちが関わっているワークショップに参加している小さい子たちが思う教訓との間に、どこかずれがあるんじゃないかなって思ったことが最初のきっかけです。その教訓のずれは本当にあるのか、そして、ずれていると感じないようにするには何を伝えればいいのかについて考えてみることにしました。

まず、私たちはアンケート調査を行いました。その調査には神戸市立義務教育学校港島学園の8年生、いわゆる中学2年生の皆さんに協力していただきました。

アンケートの内容としては家具の固定をしていますか、あなたは災害用伝言ダイヤル171について知っていますか。知っていると答えた方には、いざという時に使いますか、また、家族の人から震災の話を聞いたことはありますか、どんな話を聞きましたか、最後に、あなたが思う阪神・淡路大震災の教訓とはどういったイメージですかという内容について聞きました。

このように、カメラも来ていただいて、中学生も私たち大学生も背筋が伸びていい感じに緊張感を保てた楽しい対談、インタビューになりました。当日は神戸新聞社や、読売新聞、産経新聞の記者さんが来てくださって、中学生も記者に触れるという体験ができたことは私にとってよかったんじゃないかなと思っています。

アンケート結果です。

家具の固定をしていますかと聞いたところ、61人中60%に当たる37人が「はい」と答えてくれました。また、災害用伝言ダイヤルを知っていますかという質問に対し

て61人中11%が「知っている」と回答してくれました。

この中学生アンケートでの結果と分析です。

まず、家族から震災の話を聞いているといった人の家庭ほど家具の固定が進んでいるということが分かりました。

また、災害用伝言ダイヤル171については「知っている」と答えた生徒が9人、そのうち「いざという時にも使える」と答えてくれた人は7人でした。このことは、知ってさえいれば使えるということだと思えます。

家族からどんなエピソードを聞きましたかというのでは、つらかった、大変だったなどの思い出話が圧倒的に多かったです。親が話す時に思い出話とか大変だった、つらかったとかいう感情的な部分だけではなく、どう対策していけばよかったんだろうとか、何が反省すべき点だったのんだろうとか、今後につながる話を家庭内でしていけば、教訓の伝わり方も変わってくるんじゃないかなと思います。

阪神・淡路大震災の教訓のイメージといえどという質問には、地震は怖いもの、持ち出し袋の準備をするなど、阪神・淡路ではなくても熊本地震などでも共通していることが多く挙げられました。ここでアンケートで上がった回答を向田君と美祈ちゃんから詳しく発表してもらいたいと思います。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ2

それではアンケート回答をたくさんいただいた中から幾つか紹介させていただきます。

家族からどういったことを聞いたことがあるか。熊本地震もあったし、そろそろ準備しないといけないと言われました。

バスが半分落ちた、避難場所、地面が割れる、とてつもなく揺れたことと、今生きていてよかったと思うこと、お母さんが神戸のいとこの家で泊まっている時に、朝起きるといとこがたんすの下にいたこと、いここにけがはあ



りませんでした。火災で人が亡くなったこと、揺れで上に突き飛ばされたこと、おばあちゃんがスープを頭からかぶったこと、などという回答をいただきました。

その他にもどういうものが必要であったかというものまで広く回答をいただきました。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ3

こんな答えもありました。教訓のイメージでは水や食料も少なかったと思うので、周りと協力して助け合うことが必要だと思いました。地震はいつ起こるのかわからないから、いつ起きても大丈夫なように準備しておく。避難訓練を大切に真面目に行う。水がとまってトイレに行くのも大変だったと思う。余震が何度も来て安心できないと思う。体育館も人が多くて入れないと思う。いや、まずこの震災に遭った人たち、教訓って言ってますけど、僕から見たら悲劇のヒロインぶってるようにしか見えません。今でもテレビで阪神・淡路大震災のことを取り上げていて、20年も前なのに今も大きく取り上げられているから、それほど大きな地震だったと体験していないけど分かった。たくさんの命が奪われたといった意見がありました。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ4

新長田地区のインタビューで、インタビューの対象が70代から90代の男女の7人、その人たちが次世代に伝えたいことは、自分の意思ではどうにもならない命の重さ、すぐ避難できるようにスリッパの準備を、家具の固定、台所用品など、近所のコミュニティを大切に、横のつながりが大事ということです。みんな優しくして詳しく教えてくれました。

コミュニティなどのお話は経験された方だからこそリアルに感じる教訓であるが、中学生の話の中では全く出てきていないです。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ5

水道筋商店街でのインタビューでは70から80代の女性、男女11人に協力してもらいました。そこで、次世代に伝えたいことは命の重さ、身内が亡くなった人など本当につらい思いをした人はすぐに話せないのが事実だったり、避難時にはスリッパなどの用意が必要であるということが述べられました。

また、インタビューの中でメディアでは伝えられていませんが、避難所での話だったり、実際に経験しての本当の怖かった体験談などを話されたので、とても充実したインタビューになりました。場所は違えど、伝えたい命の重さは同じで、偶然かもしれないですけど、新長田の方とスリッパが同じ教訓だったというのも特徴として上げられてました。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ6

ラジオにも出演しました。11月17日、ラジオ関西、「時間です!林編集長!」で、リスナーの方に思いを話しました。また、12月8日、同じコーナーで伝えたい思いとの乖離について話しました。災害を経験された人が伝えたい教訓と、中学生や私たちのような未災者が思う教訓と、どこかずれていないか、被災地によって教訓も違うのでは、そんな疑問からこの取り組みを始めました。1月12日にも最後の出演予定です。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ1

そこで林編集長が私たちにこんなことを教えてくれました。子供たちが学校で習ったことを一度家に持ち帰っておうちのひとと話す、この時に、何でうちは家具の固定をしてないのなど、子供たちからの質問に親が気づかされることもあるということです。これこそ防災教育の始まりなのではないかとも言っていました。

私もこのように今回自分たちでつくったアンケートをみんなに家に持ち帰ってもらって、家庭内で話して、いず



れは家庭内で話したことによってそのアンケート内容が変化してくることがあればいいなというのをこの時に感じました。

安富ゼミの今年度のまとめに入ります。

私たちの取組みは、正直まだまだ十分ではないと感じています。継続的な調査もインタビューももっと必要です。私たち3回生が31歳になるころのずっと先の話だと、感じてしまいそうですが、10年仕事になってもおかしくないんじゃないかなと思います。

教訓は伝えたいように正しく伝わってきたのかというテーマに対してノーと言わざるを得ないと思います。これまでの伝え方では震災は大変だったんだよというイメージが大半を占めてしまって、きちんと教訓が伝わら

ないまま終わってしまいます。だけど、伝えたい側の思いは町中にあふれていることが今回分かったし、どんなに時間がかかっても皆さん話を聞かせてくださいます。私たちのような防災を学ぶ学生が、大震災を経験された方が伝えたい教訓を、私たちの言葉に変え、さらに次の世代の小さい子たちに伝えていきたいなと思います。

今年度の安富ゼミ「神戸のことは」です。伝えようとしてくれる経験者と受け取る未災者では、これまで感じていた教訓が違っていただけ、これから何年かかけて次の世代に伝える、そして伝わる教訓を生み出し、つむいでいきたいと思います。

アンケート

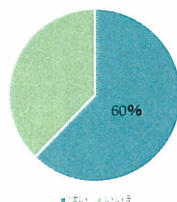
2016年11月17日(木)

神戸市立義務教育学校
港島学園8年生(中学2年)を
対象にアンケートと
インタビューを行いました。

アンケート結果

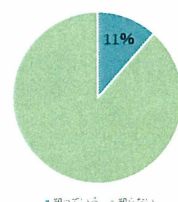
家具の固定

家具の固定をしていますか
61人中37人が「はい」と答えた



災害用伝言ダイヤルを知っていますか

知っていますか
61人中7人が「はい」と答えた



知っていると答えた
中学生7人のうち、
いざと
いうときに使えるか？
という質問には5人が
使えると回答した



【交流事業】





HATで「ほっと」できる場所 兵庫県立大学 ほっとKOBÉ



活動目標：HATに「笑顔」が広がるように

HAT神戸の現状と問題点

阪神・淡路大震災から22年が経つ今、復興公営住宅では入居者の高齢化、住民同士の繋がりの希薄が深刻となっています。震災発生当時、復興住宅への入居は高齢者世帯を優先し、抽選で決められました。その影響により、震災前に存在したコミュニティは崩壊し、孤独を感じる高齢者の、孤独死や自殺が相次ぎました。HAT神戸は震災後に出来た、元々コミュニティのない新しい街です。復興住宅が数多く建ち並んでいます。近年入居した母親世代や子ども達と、高齢者との繋がりは、ほとんどありません。復興住宅で、幅広い世代のコミュニティ形成が困難な状況となっています。



活動目的

- ①復興公営住宅に住む高齢者の孤独、寂しさを癒す
- ②幅広い世代の地域コミュニティ形成の支援
- ③子どもの居場所の提供

HAT神戸灘の浜の復興公営住宅1階テナントを拠点としています。地域の高齢者から子ども達まで、誰もが集える場所です。学生が運営し、学生が幅広い世代間の橋渡しを担うことで、住民同士の繋がりをつくる活動をしています。



取り組み



- 1 毎週月曜日、高齢者の方にお茶やお菓子を出してゆったり世間話をしています。1時間以上お話する方や、買い物でたら挨拶だけに来てくださる方もいらっしゃいます。訪れる方は日に日に増え、「ここに来るとほっとするね」と言ってもらっています。
- 2 月1回の頻度で、イベントを開催しています。おでんの販売や、地域のお花の植え込み、ハロウィン「トリックオアトリート」、クリスマスパーティなど多岐にわたります。地域に賑わいをもち、イベントをきっかけに多くの住民さんが交流できる場となっています。地域の様々な催し物にも積極的に参加し、運営のお手伝いをしています。
- 3 子ども達とトランプやかくれんぼをして、一緒に遊んでいます。日頃感じていることなどを、学生に沢山お話しに来てくれます。高齢者から子どもまで幅広い世代が、ひとつの空間に集い交流できることが、ほっとKOBÉの良い点です。



活動の効果



活動開始から1年、ほっとKOBÉは地域に密着し、地道に活動してきました。1年前に知り合ったおばあさんは、当時ほとんど笑わない方でした。毎週学生が声をかけ続けることで、今では本当に素敵な笑顔で遊びに来てくださいます。

ほっとKOBÉで知り合ったおじいさん、おばあさんと、子ども達が、ほっとKOBÉ以外で挨拶を交わすようになりました。住民同士で、高齢者を見守る目が出てきました。ほっとKOBÉがなければ知り合えなかった、人と人との繋がりの輪が広がっているように思います。

今後の展望と課題

ほっとKOBÉを利用しにくいと感じている方は、まだ大勢いらっしゃいます。お家に引きこもり気味の高齢者、また、子育てに悩み周りに相談する人がいないお母さん、問題を抱えている子ども・・・そういった方がほっとKOBÉで、地域の方々と繋がることが出来るように、イベントや普段の活動を工夫していきます。また、災害が起こった際に地域で助け合える、強いまちになるための地域コミュニティ形成をしたいと考えています。学生ができる地域防災について今後より深く学び、実践していきます。

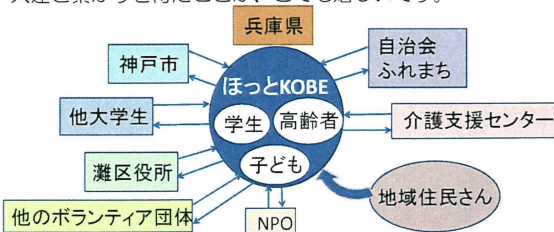
ほっとKOBÉ
神戸市灘区摩耶海岸通2丁目3番10-11
Facebook: ほっとKOBÉ で検索→



ほっとKOBÉのマネジメント

ほっとKOBÉをマネジメントしていく中で、私たちは1人、2 お金、3 情報という三本の柱を立てました。

- 1 活動メンバーを集めるために大学で講演させて頂いたり、チラシを配りました。メンバーとは毎月1回のミーティングを欠かさず行い、活動の方向性や問題点を共有しています。
- 2 2016年度、この活動の意義や効果が認められ「神戸市パートナーシップ活動助成」という、補助金を神戸市から頂いています。また、有料イベントを開催した際、住民さんから日頃の感謝の意を込めて、沢山の寄付も頂きました。
- 3 ほっとKOBÉを起点とし、行政や自治会、NPO、その他のボランティア団体、住民さん達という大きなネットワークを作りました。しかしこれは容易なことではありませんでした。地域に密着し、時に我慢強く様々な人に働きかけ、活動を継続した成果だと思っています。ほっとKOBÉの中だけに留まらず、大勢の人達と繋がりを得たことが、とても嬉しいことです。



■兵庫県立大学「ほっとKOBÉ」1 兵庫県立大学「ほっとKOBÉ」の最終報告をさせていただきます。

このたび発表を務めます3回生の一ノ瀬美希です。同じく2年生の小谷美尋さんと叶諒太君です。よろしくお願いします。

まずは「ほっとKOBÉ」の設立の経緯について説明させていただきます。

1995年、阪神・淡路大震災が発生しました。被災された方は避難所での生活、仮設住宅への入居が始まります。さらに復旧が進むと復興住宅が建設され、震災で家を失い、再建が難しい被災者はここに入居します。

当時、仮設住宅や復興住宅への入居は60歳以上の高齢者だけの世帯、また障害者のいる世帯など社会的弱者を優先する方針で進められました。また、入居する世帯は抽選で決められました。そのため、被災者は避難所から仮設住宅、復興住宅へと転居を繰り返すたびに、もともととのコミュニティが崩壊してしまい、御近所さんたちとばらばらになってしまいました。

HAT神戸は震災後にできた、もともとコミュニティのない新しいまちです。復興住宅が数多く建ち並んでいます。復興公営住宅では入居者の高齢化、また住民同士のつながりが薄いという問題が深刻となっています。そして、高齢者の孤独死や自殺も相次いでいます。また、近年入居した若い世代と子供たちが高齢者の方とつながる機会というのはほとんどありません。住民間でコミュニケーションを図ることができず、復興住宅で幅広い世代のコミュニティ形成が困難な状況となっています。

このような問題を受け、私たちは活動目標、HATに「笑顔」が広がるように掲げました。この目標を達成するために様々な取り組みを行ってきました。

活動の目的は次の三つです。

一つ目、復興公営住宅に住む高齢者の孤独や寂しさ

を癒やす。二つ目、幅広い世代の地域コミュニティ形成の支援。三つ目、子供たちの居場所の提供です。

HAT神戸・灘の浜の復興公営住宅1階にあるテナントを借りて、ここを活動場所としています。2015年10月にオープンしました。

「ほっとKOBÉ」は小さい子供から高齢者まで誰もが集うことのできる場所です。学生が運営し、学生が幅広い世代間の橋渡しを担うことで、住民同士のつながりをつくる活動をしています。

活動目的の一つ目に対する私たちの取り組みは、毎週月曜日11時から14時、来てくれるおじいさん、おばあさんにお茶やお菓子を出してゆっくりお話をすることです。1時間以上お話をする方や買い物がてら挨拶だけしに来てくださる方もいらっしゃいます。訪れる方は日に日に増え、ここに来るとほっとするねと言っています。

二つ目の取り組みは、一、二カ月に1度の頻度でイベントを開催しています。これにより地域ににぎわいをもたらし、幅広い世代の住民さんたちが交流できる場となっています。また、地域の様々な催し物にも積極的に参加し、運営のお手伝いもさせていただいています。

これまでに開催したイベントを少し紹介します。2015年11月、「ほっとKOBÉ」をオープンして間もないころに、おでんの販売とフリーマーケットを行いました。このイベントは「ほっとKOBÉ」を地域の皆さんに知ってもらうことを目的に行いました。おでんやフリーマーケットを通して学生との交流を図り、このイベントの後も多くの方々に「ほっとKOBÉ」を利用してもらいやすくなったと思います。

次に、6月、お花を植えようというイベントを行いました。地域の子供たちやおじいさん、おばあさんにも参加していただきました。「ほっとKOBÉ」周りの花壇の手入れをし、お花を植えて華やかにしました。少しのお花でも気



持ちが落ちつくわみたいな、というように住民さんから御好評をいただきました。こういったポイ捨てされたごみであるとか荒れた花壇というような見た目は、治安や気持ちの面でもとても見過ごすことのできないことだなと感じました。また、お花好きのおじいさん、おばあさんが、このイベントをきっかけにお知り合いになることもできました。また、新たにコミュニティが広がったと思います。

10月にはハロウィンイベントとして、「みんなでいっしょにトリックオアトリート」を開催しました。内容は、子供たちと学生が一緒になって地域のお宅を訪問し、お菓子をいただくというものです。そして、お菓子をくださった方には子供たちがお礼のお手紙をお渡ししました。初めてほっとKOBЕに来てくれた小さい子供たち、そして、そのお父さんやお母さんたちが積極的に参加してくださいました。おじいさんのお宅に訪問させていただいた時に、おじいさんが、ひとり暮らしだから、子供たちが大勢来てくれて本当にうれしかったと言ってくださいました。イベントの後もほっとKOBЕに遊びに来てもらえるようになりました。幅広い世代がかかわることのできたとてもよいイベントとなりました。

12月にはクリスマスパーティーを行いました。子供たちと一緒にクリスマスカードをつくり、部屋を飾ってパーティーの準備をしておじいさん、おばあさんをお招きしました。子供から高齢者の方にクリスマスカードを渡してもらったのですが、本当に皆さん、喜んでくださいました。みんなでお茶やお菓子を楽しみながら談笑し、すてきなイベントとなりました。

活動して1年たちますが、ほっとKOBЕを多くの方に知っていただき、そして多くの方とつながることができた場になったのではないかなと実感することができました。

私たちは地域の様々な催し物にも参加し、お手伝いをしています。8月、毎週日曜日に行われた子供たちの夏休み勉強会サマースクールや、HAT神戸の協の浜団地で毎月行われている歌声喫茶のお手伝い、次にこちらは灘の浜で行われている餅つき大会や親子料理教室などです。

高齢者の方だけの運営ではなく、学生が入る影響というのはとても大きいものだと感じました。イベントをより活性化させ、またお手伝いをしながら地域コミュニティ形成の支援を行いました。地道に様々な人々とほっとKOBЕにつながるの場を広げました。

最後に、子供の居場所の提供です。

子供たちとはトランプやかくれんぼをして一緒に遊んでいます。日ごろ感じている学校の先生やお友達にはなかなか言いにくいことなどを学生にたくさんお話ししに来てくれます。ほっとKOBЕに子供が大勢集まることで、

ふだん余り子供とかかわることのない高齢者の方にとっても身近に子供たちがいることを感じられてとてもうれしいようです。幅広い世代が集うということがほっとKOBЕのよい点だと思います。

活動の効果というものが少しずつですが、見受けられるようになりました。オープンしたてのころ、住民さんに学生が挨拶をしても、返してくださる方は本当に少なかったです。私たちはそれでも笑顔で挨拶を続けました。それが功を奏し、最近ではほとんどの方が笑顔で挨拶を返してくださいます。ほっとKOBЕをオープンしたてのころに出会ったおばあさんも余り笑わない方でした。ですが、今では本当にすてきな笑顔で手を振って遊びに来てくれます。

また、子供とほっとKOBЕで顔見知りになったおじいさんとか、ふだんお互いに挨拶を交わすようになったということも聞き、うれしく思いました。それによって、最近あのおじいさんを見かけてないなとか、この前会って挨拶したよというよう、地域の住民さん同士で見守る目ができつつあるように思います。

そして、まだほっとKOBЕを利用したことのない高齢者の方にとってもほっとKOBЕのにぎわいを見てほっこりしてもらったり、何か困った時に頼れる場所があるというだけでも心強い存在になれているのではないかなと思います。

次に、ほっとKOBЕのマネジメントについてお話しさせていただきます。

まず、人の面ですが、活動メンバーを集めるために、大学で講演させていただいたり、チラシを配布しています。メンバーとは毎月1回のミーティングを欠かさず行い、活動の方向性や問題点を共有しています。

次に活動資金です。ほっとKOBЕのテナント料やお茶、お菓子、印刷代などがかかります。そして、活動していく上で多様な情報を収集しなければなりません。

このように、人、お金、情報というマネジメントを学生が行っていく中で、私たちは多様な広いネットワークを形成しました。ほっとKOBЕを基点とし、行政や自治会、NPO、他のボランティア団体などです。人の問題やお金、情報は多くの方々との連携と支えによって解決してきました。

しかし、このようにつながりをつくるのは容易なことではありませんでした。地域に密着し、時に我慢強く様々な人に働きかけ、活動を継続した成果だと思えます。ここですばらしい経験をさせていただき、ほっとKOBЕの中だけにとどまらず、大勢の人たちとつながりを得たことがとてもうれしいです。

今後の展望と課題です。

「ほっとKOBÉ」をオープンして1年たった現在でも、「ほっとKOBÉ」の利用を敬遠しがちな方ももちろんいらっしゃいます。おうちに引きこもりぎみの方、子育てに悩んでいるお母さん、問題を抱えている子供たち、そういった人でも「ほっとKOBÉ」で地域の方々とつながることができるように、イベントやふだんの活動を工夫していきたいと思っています。

また、災害が起こった際に地域で助け合える強いまちになるための地域コミュニティ形成をしていきたいと考えています。学生ができる地域防災について、今後より深く学び、ここで実践していきます。

「ほっとKOBÉ」がなければ知り合えなかった大勢の人たちとつながることができ、また、住民同士がつながることをお手伝いすることをできていることが私たちのやりがいであり、とてもうれしく思います。

■兵庫県立大学「ほっとKOBÉ」2 私が「ほっとKOBÉ」に携わるようになったのは、「ほっとKOBÉ」が始まって半年ほどたったころでした。初めは何をしたらいいのかわからず、接し方とかも全然わからずに戸惑うことがすごく多かったんですが、子供たちの方から声をかけていただいたり、お年寄りの方と話をしていくうちに「ほっとKOBÉ」という場所をすごく大切にしたいなと思うようになりました。

また、ふだんの活動やイベントなどを通じてたくさんのつながりなどを見て、本当にすてきなと思っています。私自身、住民のみなさんに挨拶するっていうのが初めころはすごく緊張して難しかったんですが、活動を続けていくうちにだんだんできるようになってきたので、「ほっとKOBÉ」を通じて私自身も成長できているなと感じています。これからも、もっとまた笑顔を広げていけたらなと思っています。

■兵庫県立大学「ほっとKOBÉ」3 私は「ほっとKOBÉ」にかかわる前から、もともと防災や災害復興の分野に興味があり、ここの東館にある本学の防災教育センターでの授業を受けたり、活動に参加したりをしていました。しかし、こんなに身近な場所、こんな目と鼻の先にあるような場所でこんな大きな問題が起こっているとはまず想像もしていませんでした。「ほっとKOBÉ」の活動に参加していなければ、気づくことはなかったかなって思っています。

そして、活動していく中で少しずつ人間関係が生まれてお話しできる人がだんだん増えていくのを見ると、自分が活動している成果をすごくはっきりと感ずることができると、とても充実感を感じています。それは自

分の新しい居場所のような、自分が帰ってくる場所のようなそんな安心感にもつながっています。

この自分の感じている安心感というのを「ほっとKOBÉ」にかかわる全ての人に感じてもらいたいなというそんな思いを胸に、これからも活動を地道に続けていこうと考えています。

■兵庫県立大学「ほっとKOBÉ」1 本日もお越しいただいております灘の浜団地の皆さん、HAT神戸の住民のみなさんたちには、日ごろからたくさんの温かい支援をいただいています。本当に感謝しています。私たちの最大目標であるHATに笑顔が広がるようにをもっともっと実現していくために継続して活動していきたいと思っております。



立命館大学 「減災×学びプロジェクト」



立命館大学「減災 × 学びプロジェクト」 ～全学教養科目「シチズンシップ・スタディーズ」～

キーワード 定点観測 [あれは(私に/私たちに)何だったのか] サービスラーニング [他者との関わりを通じて学ぶ] 追体験 [被災者が未来の被災者へ被災経験を伝承していく契機]

立命館大学では2004年にボランティアセンターを設置し、地域活性化のためのボランティア活動を組み込んだ学習プログラムを全学教養科目として展開してきました。2008年度にサービスラーニングセンターとして組織変更が行われてからは、現代的な課題との関わりを通して民主主義と市民性をはぐむプロジェクトを設けるようになりました。

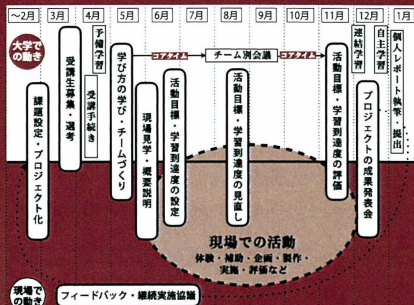
東日本大震災を経験した後、2012年に設置されたのが「減災 × 学びプロジェクト」(減災P)です。災害の悲しみは数字に表れるものではなく、亡くなった方に対して数え切れない遺族への、さらには原子力災害によってくわがまちへに帰ることができない方々への想像力を巡らせることが大切だと捉え、2011年4月21日設置の立命館災害復興支援室との連携のもと、いわゆるPBL型の震災学習プログラムが構想・設計されました。

阪神・淡路大震災は「ボランティア元年」と言われました。それから16年後の東日本大震災のあいだ、新潟県中越地震など、全国各地で災害が起こりました。そして支援の現場に立った人々が被害を語り継ぎ、つながりあい、その後新たな被災地に駆けつけることで、日常・非日常の双方でボランティアの文化が耕されていきました。そこで減災Pでは、神戸・新潟そして東北の「今」に携わりながら、仮に自らが被災者となった時の受援力向上を目指します。

メンバーは毎年3月末に募集され、応募理由をもとにした選考を経て、5月から徐々に活動を展開します。事前学習や中間ふりかえりや事後学習など、教員による授業も行われますが、大学と現場とを往復し、実践の言語化のもとで深い思考を重ねることが求められます。

サービスラーニングという学び方・減災P以外のプログラムなどについては、立命館大学サービスラーニングセンターのホームページをご参照ください。

<http://www.ritsumeai.ac.jp/slc/>



シチズンシップ・スタディーズIの年次スケジュール

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
フィールドワーク												
ボランティア運営参加												
参加観察												
企画展示・ワークショップ												
その他関連の動き												

減災Pの年次スケジュール(2016年度)

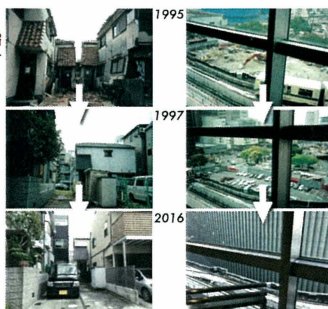
減災Pと神戸との関わり

2012年から、年度当初に人と防災未来センターを見学。2013年度に資料室スタッフから提案。

「大仁さんという個人の活動を再評価し、公の財産として次につなげるためにも、大仁さんが撮影された場所の現在を新たに撮影し、展示したいと考えています」(高森順子/2013年5月14日 1:12AM)

↑ 故人が遺した写真集を発見・市井の記録に着目・学生の学びに

大仁節子(2009)
『翔け神戸：阪神・淡路大震災の定点撮影』
友月書房 [2,000部・自費出版・A5版168ページ]
□ 阪神・淡路大震災当時、神戸市東灘区森南町在住
□ 震災時の写真とその後の復興の様子を定点撮影
□ オールカラーで123セット(246枚)を掲載し無償配付



神戸での学びと他地域からの学び



東北の復興を考える上で大規模災害から復興を遂げた神戸に学ぶと共に、神戸以外の復興過程からも学ぶため、都市型ではない災害として中越に着目。東北の被災3県でも福島が置かれた状況に改めて関心を向けて活動。また、熊本でも支援。

減災Pによる各地域への関わり

災害	神戸	中越	東日本大震災	熊本
地域	東灘	小千谷	大船渡	熊本市
震災から	21年	12年	5年6ヶ月	6ヶ月
関わり	定点観測・復興支援	復興支援・人道的支援	復興支援・人道的支援	復興支援・人道的支援
活動風景				
現地協力	研究者・住民団体	住民団体	住民団体	住民団体
減災Pの関わり	2013年・2012年・2012年・2015年・2016年			

各地域からの学びと成長・減災への視点

支援を受けた学びと成長	減災への視点
神戸	あまり知らなかった点も、土壌のある人が観ることで関心に向く
中越	地域の担い手集団は選任し、活動の背景への理解が重要
大船渡	震災前の出来事への再関心
熊本市	誰かに来てもらえることが、知らないことよりも知られたいという実感が、被災された方々のお人前が、支援の継続度を左右する

今後の継続・発展への視点

まずは大仁さんによる1枚目・2枚目に続く「3枚目」の全撮影へ。そして伝える活動のモードに。

撮影の意味・地点確認 → 後援外担しながら撮影 → GPSで撮影地点を記録 → 大仁さんの身長を想定 → 当時の街を商店に尋ね → 記憶と記録とを照合 → 生きている被災者から → 未来への伝言を紡ぐ

なぜ当時、その方法だったのかの理解が大切。 → 効率と確実さのために！(同じ苦労も学びかも?) → 変わるものもあれば変わらないものもあります → 「被災者」という立場はまさに自分たちのこと… → 地点の3つの時代を比べたフォトブック等を…

人によって慣れ・不慣れがあり「キャラ」設定を → デジタル撮影ですが可能な限り当時の気持ちに… → 観るだけでわからないことが尋ねてわかることも → 地点の3つの時代を比べたフォトブック等を…

■立命館大学減災×学びプロジェクト1 こんにちは。立命館大学減災×学びプロジェクトの発表をさせていただきます。

法学部2回生の嶋谷優衣と申します。

今回は私たちの活動について三つのキーワードからお話をさせていただきます。

一つ目は定点観測です。今日会場にもお見えですが、高森順子さんと山口先生のもとで復興を遂げた神戸のまちを2014年から撮り続けています。

二つ目はサービslラーニングです。今日お話しさせていただく活動は、立命館大学サービslラーニングセンターによる成果科目として位置づけられているものです。

東日本大震災の後、2012年度に始まった事業で、東北の復興のために新潟と神戸の経験から学ぼうとプロジェクトが組み立てられています。

三つ目が追体験です。メモリアルアクションKOBELにも使われているとおり、私たちは震災を経験していない被災者です。そんな私たちが過去の災害、また復興過程にあるまちを訪れ、それぞれの災害の特性などを見詰め直すことで災害を追体験していきます。

ではまず一つ目のキーワード、定点観測について詳しくお話しします。

このスライドは2014年12月22日にテレビ大阪で紹介されたニュース素材を使わせていただいています。

左上の写真にあるパネルは震災から19年後に人と防災未来センターで作成、展示されたものです。後で紹介しますが、東灘区の森南町に住んでいたある女性の方が上から1枚目と2枚目の写真を撮影しています。私たち減災×学びプロジェクトのメンバーはその続きの一番下の3枚目の写真を撮影しています。ちなみに、この減災×学びプロジェクトというのは減災Pとか減Pと略されていますので、そうした言い方を今後使わせていただきます。

これらの神戸の活動を定点観測と位置づけています。減Pと神戸のかかわりは高森順子さんによって導いていただきました。減Pが始まった2012年、東北の復興に携わる上での参考にと、人と防災未来センターの見学と資料室の活用をさせていただきました。

そして、2013年にも同じ協力をお願いしたところ、高森さんから活動の提案がなされたとお聞きしています。それは森南町に住んでいた大仁節子さんという女性が自費出版された写真集、こちらが実物の方ですが、「翔け神戸」に感銘を受け、既に亡くなってしまった大仁さんが撮影された場所と同じ場所の今を訪れて、同じ角度で切り取って撮影していきませんかというものでした。

実は山口先生と高森さんが同じ研究室の御出身とい

うこともあって、積極的にこの活動が取り組まれることになりました。こちらは2カ所だけの紹介になりますが、実際私たち、2016年度のメンバーで撮影したものです。震災直後の1枚目、復旧から復興の過程を撮影した2枚目、そして、現在のまちの風景が3枚目です。

左の方にある写真が森南町の2丁目、右側にあるのが三宮駅前のダイエーの6階から見おろして撮影したものです。どちらも場所の特定をするのにとても苦労した場所です。

左の方の写真を見てもらうと、全然震災当時と今2016年に撮った時と全然変わっていて、住宅街などでどんどん家とか建てられてしまっていて、なかなか見つけられませんが、例えばこちらにある倉庫だったりとか、ここの塀だったりとか、何か今でもちゃんと残っているところがあったりします。

隣の右側のダイエーの方ですが、今、ダイエーとポートアイランドの線路の前にミント神戸がもう建てられてしまっていて、最初、ここを探し出すのは、ダイエーがミント神戸に隠れてしまっていたので、探すのにとても苦労しました。

このように20年以上経つと、かなり変わっているところとかもやはり多いですが、震災当時と変わらない部分もあり、定点観測をして写真を見比べることで違いに気づくことができました。

定点観測の意義は2014年3月の人と防災未来センターの資料室ニュース53号でも詳しくまとめられています。インターネットでも公開されていますので、もしよろしければ検索していただき読んでみてください。

先ほどテレビのニュースでも取材されたとお伝えしましたが、新聞でも各紙で報道されました。ちなみに今日もNHKラジオの大山さんにも取材いただいています。昨年、大山さんに私たちの定点観測に同行いただきました。他は山口先生にお聞きしたりとか、土地資料を参考にしながらお話しさせていただきます。

このように活動を通して学ぶ教育プログラムはサービslラーニングと呼ばれています。減災×学びプロジェクトは立命館大学の教養科目シチズンシップ・スタディーズIという科目に位置づけられており、年間を通して大学と現場を往復して学ぶこととされています。

こちらの図は立命館大学サービslラーニングセンターによる受講ガイドから引用しています。減災×学びプロジェクトの他にも京都の三大祭りの一つ、時代祭の運営に携わるもの、区役所の広報誌を企画、編集するもの、滋賀県草津市の商店街でライトアップイベントのお手伝いをするものなど多くのプロジェクトがあります。

プロジェクトが授業として位置づけられているので、

減Pでは年間のスケジュールがあらかじめ示されていました。こちらが2016年の当初の計画でしたが、4月の熊本地震やこのメモリアルアクションKOBÉへの参加などもあって、実際の動きはこのとおりではありません。

特に、平成28年熊本地震が起きたことで、今年の減Pは例年と違った動きとなりました。引き続き、神戸、中越、そして東北は大船渡市や楢葉町とのかかわりも重ねてきましたが、熊本地震により大きな被害もたらされた西原村へ農業復興ボランティアセンターで活動させていただきました。

ちなみに先ほどのスケジュールはポスターの方でも載せています。そこでは詳しく説明しているのですが、東北や熊本での活動先は立命館災害復興支援室による連携協力先での活動となっています。

こちらが五つの現場での活動を振り返り、私たちが学べたと捉えている内容です。メンバー全員がそれぞれ感じたことを表に示してまとめています。

まず、特に今回私が強く印象に残っているものを紹介したいと思います。

今回、西原村での活動に、私は参加ができなかったんですけど、西原村へ行ってきた他のメンバーの話を聞いたりすると、震災の被害が深刻な感じとか暗い話ではなく、地域の方がとても温かく迎えてくださった話とか、食べ物がおしかった話など、その地域の人柄や震災に負わずに元気に頑張っている様子が伝わってきました。

他の地域での活動でもそうですが、私たちはその地域での震災があったからとか、震災の影響で苦しんでいるから支援しているというよりは、その地域の人々の温かさとか地域の魅力に引かれたからこそもっとかかわっていきたくて感じたんだと思います。

それぞれの学びから、特に、私がピックアップしたいのは神戸の定点観測をしている時に感じましたが、私たち

は京都の大学生で、神戸の土地についてやっぱり全然知らない人が多いです。定点観測をする人に、やっぱり神戸の人がいたら、あの場所かって見当がつくものと思うんですけど、やっぱり神戸に土地勘がない人から見ると、昔の写真を見ても今の写真を見ても、あ、こんな場所があるのかって感じるだけだと思います。ただ神戸の土地勘がある人がいるのといないのでは、やっぱり定点観測の見方とか進め方が変わってくるんじゃないかなと感じました。

また、中越の方で名前呼び合う関係がより関係を深めると書いてありますが、これは私は減Pの活動を通して初めて学んだことでもあります。新潟の小千谷市塩谷集落では何回か活動をさせていただきましたが、行くたびに名前を覚えてもらって、とてもそれがうれしくて、逆に私たちもかかわった方々の名前を覚えて、名前を呼ぶことを心がけていました。名前呼び合うことで、ただの大学生と地域の方々ではなくて、一人の人として認識されて、個人と個人のつながりができていると思っています。これが減災にも生かせるのではないかと感じました。もし震災があった時に全く名前を知らない人よりはまずは名前を知っている親しい人とか近所の人の方がより助け合いやすいのではないかと思います。ふだんから地域でのつながりや人とかかわることの大切さを改めて実感した1年でした。

今日の発表に先立って2016年12月16日に京都府がベンチャービジネスの支援の拠点として設けている町屋をお借りして、「わが町の減災を考えナイト」という企画をさせていただきました。中間発表でも計画としてお話ししたとおり、活動先の一つであり、田植えから稲刈りまでかかわった新潟県小千谷市の塩谷集落の魚沼産コシヒカリの新米でおにぎりを提供しつつ、五つの災害を現場で追体験してきた内容を紹介しました。また、参加してい



いただいた方々が愛着を持つ地域の暮らしについて語り合いました。

語り合うことが災害からみずからの命を守り、助かった命が失われないようにするという減災のための視点を引き継がすことができると呼びかけました。

以上、今日は三つのキーワードをもとに活動を紹介させていただきました。

定点観測では個々人にとって、そして過去のメンバーからバトンを引き継いだ私たちが大仁さんの思いを受け継いでいく意味を探ることができました。

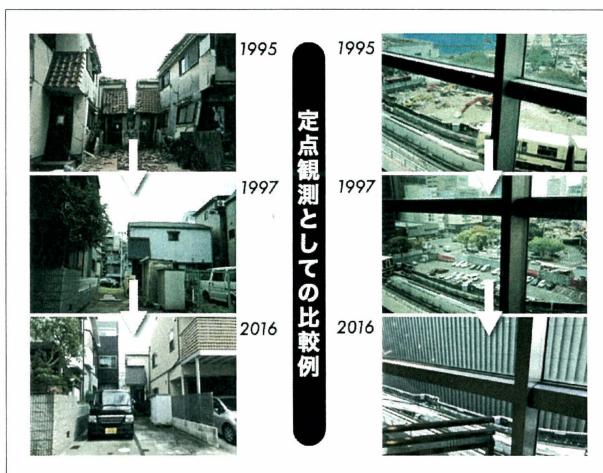
「翔け神戸」のあとがきで、大仁さんは、瓦れきを処理してしまったら、その懐かしい町並みが消えてしまうとおっしゃっています。あれから22年を迎えようとしていますが、神戸の町並みは確かに変わりました。しかし、改めてあの日を思い、あの日に思いをはせることが大切だと実感しました。

これはボランティア調査活動ではなくて、サービスラーニングという視点で臨んだからこそ得ることができたと捉えています。

今日はうまく行ったことばかりをお話していますが、チームワークがうまく行かず、苦労したこともあったりしました。しかし、未災者である私たちが過去に災害を経験した方々と丁寧にかかわることで、さらなる未災者が学ぶきっかけをつくり続けることができます。

減災Pでは毎年過去の受講生がサポーターとして補佐役をしてくださっているのですが、災害への追体験は今後も課せられるように、私たちも何らかの形でまた次年度以降の受講生たちと現場で会いたいと願っています。

最後に改めて、このような機会をいただきましたこと、高森さん、山口先生、また、災害メモリアルアクションKOBÉの関係者の方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。



定点観測		私／私たちにとって 何だったのか 意味を探る
サービス ラーニング		チームワークのもと 他者との関わりを 通じて学ぶ
追体験		未災者が未来の未災者へ 被災経験を 伝承していく契機

公開サロン 「未災者が伝えられること」



■司会 この活動で印象に残った経験を参加学生同士で共有し、自分たちと同世代の若者に対して「神戸のことは」をどのように伝えることができるかについて意見交換を実施していただきます。

■司会 出演者を御紹介いたします。

ファシリテーションを担当していただきますひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査本部の高森順子研究員です。

■司会 続きまして、グラフィックレコーダーを担当していただきます京都産業大学教育支援研究開発センターの鈴木沙代さんです。

■司会 サロン参加者につきましては本日御参加いただいている学生さんや関係者の皆様になります。意見交換にぜひ御参加ください。

■司会 ここからの進行は高森研究員にお願いしております。それではよろしくお願いします。

■高森研究員 前半15分間という本当に短い間でこの1年間の発表をしてもらいました。1年間といっても数年前からずっと続けられている活動も含みますので、本当にこの15分間では一部だけの発表だったかと思います。話し足りなかったこと、ちょっといいこと言っちゃったけど、本当はもっと大変なことあったんだよとか、色々あったと思います。

そんな中で、今回はちょっとこの後半はモードを変えたいと思います。モードを変えて、タイトルをまず見てください。未災者が伝えられることとあります。発表の中でも出てきた言葉ではありませんでしたが、私は未災者ではありません。小学校5年生、10歳のときに震災を経験しているけれども、経験者でも伝えるって難しいってことも思いますし、災害を研究するっていうそういう職業を選んだ私っていうのはすごく特殊な人間だと思うんですね。なおかつ今回集まってくださった7チー

ムの方々も、きっと同級生の方からはどう思われてますでしょうか。何でそんなに頑張るのとか、そんなおもしろいのって言われたりしたことないでしょうか。

今回7チームの人たちの発表の中で、どうしてあなたたちがここまで熱心にやるに至ったのかということやちゃんと考えることが必要だと思いました。それはどうしてかということ、災害から年月がたつごとに震災に遭っていない人、震災を経験していない人たちが震災を経験していない人たちにその経験を伝えるっていうことをするしかない状況が出てきます。その時に災害を経験していないけれども、こういった活動をしているあなたたちがどうしてこういう活動に参加し、活動の中でもものすごく印象的な出来事、何かこうずっと心の中に残っている出来事があるとか、そういったことを聞くことで、最終的な目標としてはこの1年間で経験したことの中で自分たちと同世代の若者にこの1年間での経験で「神戸のことは」というものを伝えられることがあるとすれば、誰に、要は同世代でも、同世代でもどんな同世代の人に何をどんなふうに伝えるっていうことができるだろうかということや最後にちょっとヒントのような形をいっぱい出して、次のこの神戸の場でこの7チームの来年度もそうかもしれないですし、新たに参加するチームもあると思いますので、その時にこれを最初に知ってもらうことでよりよい活動ができたかなというふうに考えています。

公開サロンのルールをひとつだけお伝えします。

これはさっきまでの発表ではありません。例えて言うなら、学校でみんなでミーティングしているようなそんな感じで話してください。あともう一つは先生から聞いた言葉ではなく、自分の言葉で話してください。これは、とても重要なことです。あとはこういうことをどう思いますかというふうに聞きますので、その場合、手を挙げてください。マイクが回りますので、マイクが回ってから話してってください。



では、始めてみたいと思います。今回7チームの発表を聞く中でヒアリングをされていたりとか、アンケート調査をされているとか、あとはゲームをつくったりとか、本当に色々な形で神戸でやってきたこと、神戸で経験した人たちの言葉を聞いたり、本を読んだ人も、そういった形で様々な知恵っていうものを活動っていう形で結晶にできたと思います。

そんな中でも神戸の人に出会ったり、あとは活動する中で一番印象に残った出来事は何でしょうか。どうしてそれを聞きたいかっていうと、多分印象に残った出来事っていうのは、心に残ってるってことですよね。ということは恐らく伝わっているということと近いことだと思います。でも、この印象に残った出来事っていうのはアンケート調査をしてすごくいい話が聞けましたってことだけじゃないと思います。何かしらないけど、ものすごい怒られたとか、何だか悲しい気持ちになったとか、この言葉を聞いてどうしたらいいかわからない気持ちになったとか、そういったまだ解決していない言葉、むしろそういう言葉が欲しいと思ってます。すごく難しいことを聞いてますけれども、それをちょっとお話ししてもらえたらいいと思うんですが、まず、この1年間の中でこんなことを聞いた時にこの人の言葉が印象に残ったであるとか、そういったことはありますか。もし、そうじゃない場合は、ちょっと興味があるところから聞いていこうと思います。

舞子高校さんはヒアリングと学校で講義をするっていう両方の形をとってましたね。でも、ヒアリングの中の結果で、体験を知っているのと知らないのでは対応が変わるっていうこの1点がすごい大事だっていうことが分かったっていうお話を発表でされてましたよね。このヒアリングの中で、何かこう、この言葉だけじゃない、多分、本当に新長田とかの駅前でお話を聞く中ですごく印象に残った人とか言葉とかっていうのはありませんか。

■高森研究員 新長田とか垂水とかでは最初、とても緊張したでしょう？

■兵庫県立舞子高校 はい。垂水で話した時は商店街の方にいきなり話を聞いたり、商店街へ昔からお店をやっている人に話を聞いたんですけど、私が一番その中で印象に残ってるのは、商店街の魚屋さんのおじさんの話で、だから今の子どもたちは飢えと寒さがないから弱いみたいな。

■高森研究員 飢えと寒さ。

■兵庫県立舞子高校 飢えと寒さ。何か昔の人は寒かったから強くて、強いって言うか、何か防災とは確かに関係ないなって思ったんですけど、何か地震の話をした上でその話をされて、関係ないけど、飢えと寒さがないから今の子どもたちは、今の子どもたちは弱いじゃないけど、色々なものに対応していく力がないみたいなことを言われて、例えば北海道と沖縄とかやったら、どちらが戦争したら強いってなって、やっぱり寒いところに対応できる方が強いから北海道が勝つよなみたいな話あって、まとまりがないんですけど。

■高森研究員 そういう話が聞きたいです。

■兵庫県立舞子高校 その飢えと寒さの話が自分の中では印象に残ってます。あと新長田は地域の方にお話を伺ったんですけど、新長田ってやっぱり火事とかあって大きな被害があったから、ここにこういうもんがあって、2階建てのものがぼんと落ちてきたみたいな話をされて、なんでやろ、腕つかんでお話しされたんで。何か身ぶり手ぶりで、普通の人やったら絶対ここまで話してくれへんなみたいなことを熱弁してくださいました。

■高森研究員 それは聞きに行く時に、急に高校生がやってくるわけじゃない。発表の中でもちょっと最初は、ね、そういう中で、でも聞いた瞬間にすごく饒舌に話してくださる感じなんですか。

■兵庫県立舞子高校 うまくはないけど、また失礼やけど、何か一人一人体験が違うから、何か自分が言いたいことを



一つぼんって何か、ぼんじゃないけど、言ってくれた。

■高森研究員 ということは、印象に残ったことっていうのは、震災の時にこういうことがあってこう大変だったんだの、その先の話。先の話なのかな。どういう言葉が印象に残ったの。

■兵庫県立舞子高校 垂水の時なんですけど、垂水はどっちかっていうと被害が少なかったんで、何か最近のヒアリング調査で、南海トラフの時に津波が来るといいますかみたいな、シール貼ってやった時に、津波が来る想定は出てるんですけど、新長田で聞いた時は、対応、作戦みたいなのを立ててたり、準備よくしてるんですけど、垂水の方は商店街が海沿いに、海の近くにあるんですけど、なんか津波が来ないと言われていて、それが自分の中ではすごく怖くなって思いました。

■高森研究員 やっぱ聞いてみないとわからないし、でも、住民の人たちはそれを何となく意識してるかもしれないけれども、こういう言葉をかけられないと多分出てこない話題かもしれないですね。だから、多分「神戸のことば」ということを考えると、舞子の子たちが話したからこそ出てくる言葉で、もしかしたら、その住民の方も言ったことのない言葉かもしれない感じがしますね。ありがとうございます。

発表の中ではこういう調査をしましたというところの中で、なかなか発表にはできない言葉っていうのはたくさんあると思うんですね。そういうものをやっぱ聞いておくことが、今日しかできないことなので、少し聞いていきたいと思います。

随時言いたいっていうことがあったら、手を挙げてくださいね。でもそうじゃない場合はどうですかというふうに聞いていきます

関西大学の「ぼうさいマイCREDO」さんのお話の中で、神戸の最初のきっかけになったところですよ。きっかけが、とてもマイナスなというか、災害が起きていない

にもかかわらず、もうここはだめだっていうようなマイナスな言葉だったと思うんですけども、ちょっとそこにすごく興味があるんですけど、そういう言葉の中でも何か心にひっかかっている言葉ってありますか。

■関西大学社会安全学部近藤研究室 まちの人だとか、お店を構えている人だとか、他にももう家にいてはる人に1件1件話を聞きに行った時に、ネガティブなことを言う人もいっぱいいましたが、でもそういう人は何か共通して、東日本と比べたら全然ましだよねっていうことを言う人がかなりいたのがすごい印象に残っています。でも、比べるものじゃないとは思うですよ、私は。ただでさえ、東日本と比べなくても、やっぱり阪神・淡路ですごい経験されてるから。比べて、いや自分らはまし、うん、やっぱ向こうの人はかわいそうで、だからうちんこはそれに比べたら全然ましだよねっていうふうに思うのはちょっと違うのではないのかなというふうには、そういう話を聞きながら、ちょっと心の片隅で思っていた時はありましたね。

■高森研究員 この言葉って、より大きな災害とその人は思っていて、それよりかは阪神・淡路はましだったっていうのは、ポジティブな言葉ではないと思いますか。

■関西大学社会安全学部近藤研究室 ポジティブではないんじゃないかなとは思いますが。うん、違うかなと思う。

■高森研究員 なるほど。やっぱりじゃあそれは、阪神・淡路の話をしていても、東北の話が出てきたり、その他の災害と比べてという話が出てくる、ことが最も印象に残った、語りや話。

■関西大学社会安全学部近藤研究室 やっぱそういう経験をされてきたからこそやっぱその後の大きい震災、だから新潟だとか、そういう東北だとか熊本のこととかも、日ごろから気にかけてニュース見てるっておっしゃった人もかなりおられたので、そういう意識がやっぱりその阪神・淡路でその人たちの震災に対する意識って



いうのは大きく変わったんじゃないのかなとは、話聞いていて思いました。

■高森研究員 もう少し聞きたいんですけど、「ぼうさいマイCREDO」で宣言文とか新しくちょっと考え方を变えるというか、形の言葉の中で一番印象に残っている人、こういう人がいて、こういうことを言っていた人がこんなことを言ったっていうような、ちょっと一連のシーンがわかればうれしいんですけど、ありましたか。

■関西大学社会安全学部近藤研究室 かなり多くの人にお話を聞いていて、200人ぐらいの人から話を聞きました。だから、ただ単にCREDO書いてくださって言ってスケッチブックとペン渡して書いて、それを回収しただけじゃなくて、とりあえずあの時どうされましたとか、今どうしてますとか、そういう震災のことも踏まえて書いてくださった言葉が多いので、本当にその人その人、様々なストーリーがあって、そういう過去があって今があるっていうのがやっぱりあるので、どの人って言われても、実際に家の下敷きになってはった人とかもやっぱり中にはいましたし、だから、そういう経験踏まえて常備薬とか懐中電灯は常日ごろから持っておくっていうようなCREDOももらいましたし、そういう過去があったから、今の私のこういう心構えができるっていうのは、そういう一人一人色んな過去があって、その人が今思うことがあるっていうのがそのCREDOの活動を通じて私が知ったことかなとは思います。

■高森研究員 そう考えると、私なんかだと、お一人のことをしっかり見るっていうことが大事なようにどうしても

思いがちだけれども、すごく大きな、200人っていう数で丁寧に聞いていくってということで、そこから伝わってくるものっていうのはあると思いますか。

■関西大学社会安全学部近藤研究室 カレンダーとかに載ってるのは、ただスケッチブックを抱えてる写真を見ることになるんですけども、そうやって掲げてる言葉の裏にはそういう二十何年かの大きい思いがあるっていうのは、やっぱりこうやって私が一人一人話を聞いて知ってきたことなので、まずそれを伝えることも大事なかなと思います。

■高森研究員 そう考えると、やっぱり「ぼうさいマイCREDO」っていうと、本当に宣言文のすごく短い文章なんだけれども、調査をしてきている大学のメンバーたちは、きっと多分その読み方が違うんじゃないかなと思うんですよ。そこの後ろにある背景がわかって、じゃ、背景のわかっていない人たちに「ぼうさいマイCREDO」を見てもらう、要は活動にも参加してない、そういう人たちに見てもらって、こういう経験をこの大学でこのチームでやりましたっていうことを共感してもらうって、すごく難しくないですか、どうですか。

■関西大学社会安全学部近藤研究室 それって難しいことだと思います。でも、それを見て、じゃあ私にできることって何だろうって、そういうふうに自分自身で自分の新たなCREDOをそうやって考えてもらうことが一番の狙いなので、その人その人で捉え方は違うと思うんですけど、それが別に悪いことじゃなくて、見たふうに受け取ってもらったらいいので、それで自分の生活を振り返っ



て自分のCREDOを掲げてもらうことが一番こっちとしてうれしいことですし、そういうふうにしてもらいたいなって私は思います。

■高森研究員 だんだん言葉のそのままの意味っていうものと、でも調査をする中で背景を知っていく中で言葉の意味っていうものがやっぱりそれぞれの、この1年間とか数年間の経験値だけれども、全然違って見えてくるっていうのがわかってきたんじゃないかなと思います。

ではもう少し話を聞きたいのですが、神戸学院大学さん、教訓が震災を経験した方々と我々を含むかもしれないけれども、中学校の生徒たちの教訓っていうものがずれていうものがあるっていう話があったと思いますけど、その話の中で新長田と水道筋でインタビューしていますよね。このインタビューの中で、やっぱり一番大事なのは人の命だっていうことだったり、コミュニティだっていう言葉がすごく出てきたっていうお話がありましたけど、それはどんな語り口で、どんな時にどんなふうに話されていたかっていうのを、そのシーンをちょっと再現しながらお話してもらってもよろしいですか。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ 僕自身は水道筋の方に行って、水道筋、倒壊家屋が多かったんですけど、お年寄りの方が団体で集まっているところにちょっと話を伺って、コミュニティが大事だとかは、やっぱりずっと近所づき合いが多かったからこそ、周りの家屋が倒壊して助け合うことが大事だったりとか、またちょっと離れてるけど、こっちの様子が気になるから、遠いけどわざわざこっちに来てくれて手伝ってもらったりとかいうことでのコミュニティが大事だっていうことをおっしゃっていました。

■高森研究員 それ、どんな人でしたか。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ おばあちゃんとおじいちゃんですね。

■高森研究員 それは買い物をしてた人ですか。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ いや、もうただ単に座って、交流してる人です。

■高森研究員 アポなしで話を伺いに行ったのですか。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ はい。アポなしです。

■高森研究員 そういう時に、でもこうやってわあっと話してくださるっていうことなんですよ。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ はい。

■高森研究員 これってすごく、みんな普通と思っているかもしれないけれども、ものすごく特殊な状況だと思うんですよ。高校生、大学生ですっていうふうに、学ぶ立場にいる人たちだから協力してあげようっていうのはあるかもしれないけれども、これだけ急に会って、わあとお話しされるっていうことは、多分きっと、神戸には語り部さん、潜在的な語り部さんがたくさんいるということなんです。だから、「神戸のことば」に出会うっていうことは、大学生や高校生のこの人たちが神戸に行くことによって、行って話をすることによって「神戸のことば」っていうのが、もしかしたらもうなかったものが出てきてるっていうこともあると思うんですよ。そういう言葉が出てきているんじゃないかなと。そうだからこそ、本当に一番大事な生命の大切さとか、そういった言葉が出てきたんじゃないかなというふうに思いました。はい、ありがとうございました。

少しが変わりますけれども、D-PROの3年のRESQについて、大変よい発表ありがとうございました。あの発表の中で、最初の言葉がすごく気になったんです。小さいころ災害は自分とは関係ないことだと思っていたというお話ありましたよね。災害はいつどこでも何どきでも起きるってわかってはいたけど、でも自分のこととは思えなかった、でも、今ここにいますよね、あなたは。それは



どういきっかけでここにいる、こういうことをすることになったのかっていうのをちょっと教えてもらってもいいですか。

■**国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 3年生** まず、東日本大震災があったのが私が確か中学の卒業式の日とかだったんです。卒業式の日家に帰ってきた時にそれこそ家が流されている映像をテレビで目にして、それが本当に逆にリアリティーがなかったというか、本当にアニメの世界のような光景でして、それにまず衝撃を受けたっていうのがあります。

それで、本当に起こり得るものなのかなと感じました。

あとは明石高専で1年生で防災リテラシーという授業があるんですけど、その時に防災について学べる授業なんですけど、それを学んでいくにつれて、起こり、実際に自分の身に起こり得ることだから、無視できないというか、本当に自分のものとして捉えないといけないなと感じていったという経緯があります。

■**高森研究員** では、自分が映像で見たっていう経験と、あとは学校での学びっていうものがちょうどこうコンビネーションというか、くっついたみたいな形で災害っていうものに対する活動するっていう方向に向かったっていうことなんです。これはすごくおもしろい話だと思います。

あともう一つ聞きたいんですけど、今回、「神戸のことば」というものを防災クイズという形でカードにしていますけど、その防災クイズの中で一番印象に残ったもの、それはどこで、どんなふうに知った情報ですか。一押しを教えてください。

■**国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 3年生** 難しいですね。そうですね、今回「神戸のことば」の、今主に全体のクイズの割合として一番多いのが神戸市のホームページに掲載されている、何か神戸市が被災者の方々に対して行ったアンケートが全部ホームページに掲載され

ているんですけど、その内容をクイズにしているんですけど、何か豆知識みたいなものとかが多くて、実際にそのクイズとかやってみたら、へえ、そうなんだとか、例えば簡単な例ですけど、大雨が降ってる時は長靴で外出するよりもスニーカーで外出したほうが動きやすいよとか、そういう豆知識みたいなものはいっぱいあって、何かこれとは決められないですけど、色んな知識があって、そこからやっぱり学び取れるものというか、自分が実際に災害を経験したら本当に役に立つ知識がいっぱいあって、そうですね、全体的に。

■**高森研究員** こう思うと、全体っていうのは多分「ぼうさいマイCREDO」と同じ部分もあると思うし、さっきの例として言ってくれたお話は、普通、普通の要は日常なら大雨が降ってたら、普通長靴履きますよね。でも、そうじゃなくってスニーカーのほうがいいっていうような、ちょっと日常とは違うんですよっていう、ギャップがある豆知識っていうものが印象に残ったっていうことでいいですかね。

■**明石工業高等専門学校D-PRO3年生チーム** そうですね。

■**高森研究員** なるほど。ギャップっていうのは、ちょっとこれまでの色んなお話の中でも出てきたような気がするんですね。

最初に舞子高校の子たちが言ってくれた言葉も、震災の話をした後に飢えと寒さがないから、最近の子はどうなんだという話をするだとか、あとは、ちょっと話を始めたらすごく長い時間話をしてくれるだとか、自分の予想をちょっと覆すような、それは幸福な場合もあるし、ちょっと不安も感じることもあるし、でもそうだけでも、そういうギャップのある経験っていうものを積み重ねていったことが印象に残った経験になっているのかもしれないし、「ぼうさいマイCREDO」とさんとかの場合だと、200人っていう大きな人数に同じ形で語りかけ続け



るってということは、自分の語りかけの仕方が変わっていくだろうし、そういう普通の生活ではやらない経験っていうものを繰り返していくことっていうことが印象に残る経験になるのかというのが、少し共通項として出てきたのかもしれない。

D-PROの2年生の皆さんは、西之町のまち歩きの中で、気になった言葉として、もっと若い人を巻き込まなければというふうに住民の人たちは言ってるんですね。その中であなたたち若い人がいますよね、どんな気持ちでそれを聞いてますか。

■国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 2年生 もともと私たち2年生チームは、まちの人たちは災害が起きた時に助けてくれる人が欲しいっていうことで、すごく多く聞くんですけど、実際、私たちは住んでいる場所も違うし、特に2年生は地元が明石じゃない人が多くて、もともと土地勘もなければ、災害が起きた時にそこに助けに行くことができないので、そんな中でその声を聞いて何ができるかを考えていくことがすごく難しくて、定期的に会合とかもするんですけど、その時に結構道の整備がなってないとか、市の管理がなってないとか、自分たちにはできないことに関して言われることも多くって、でも、その中で自分たちには時間がないやっていう言葉を聞いて、こう、どうしたらいいんやろってすごい思ったんですけど、絶対捨ててはいけない言葉やなと思って、これからもうちょっと自分たちがしていくことを考える必要があるなと思いました。

■高森研究員 多分、この言葉も自分たちにはもう時間ないっていう言葉だったりとか、あと住んでないあなたたちに対して、いやもう年配の人ばかりやからどうしたらいいんやということを言うってっていうことは、もしかしたら言う宛先は違うかもしれない、本来は違うかもしれない、だけど、あなたたちに言うってっていうことは、どういう意味を持つと思いますか。

■国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 2年生 直接自分たちが何も大きなことはできなくても、それをできるまちの若い人たちとかにつなぐ役割をしていく必要があるなと思いました。

■高森研究員 この話を聞いてると、やっぱりあらゆる活動の中でもしかしたら、我々今7チームの活動それぞれですけども、経験をした人に話を聞きました、分かりましたで終わりではなくって、それを翻訳っていう言葉を使ってたチームもあったと思うんですけども、それをまた別のところにつなぐっていうそういう役割が必要になってきていて、それが求められている。それは本当に大変な形であらわれているのがこのD-PROさんの活動の中かなというふうに思いました。

そこからつながるような部分として、ほんとKOBЕの活動はまさに結ぶというか、もともと本当に震災後新しくできたまちで、しかも歴史背景というのは復興住宅という少し特別な歴史を持っている。そういう中で全くそこから縁がないというわけではないだろうけれども、兵庫県立大学としてあらわれて、なおかつそういう場も持ちながら進めていく、最初は本当に部外者という感じで、中間発表のころだったでしょうか、その話の中で勧誘をされたり怪しい人たちじゃないかと思って不安がられたことがあったというようなお話ししてたと思いますけれども、ほんとKOBЕさんの場合は、ちょっとその他と毛色が全然違うと思うんですよね。すごく大事なことをしてると思うんです。ずっと聞きたいなと思ってたのは、多分、今これまでの6組の活動というのは、ヒアリングという形であなたの話を聞かせてくださいと言って聞いている話だと思うんです。でも、ほんとKOBЕさんの場合はそれは言わないですよね。場を提供して、子供世代と親世代とその親の世代を結ぶっていうことをされてると思います。あとは震災を経験した人たちと経験されてなくて新たに入ってこられた方との関係を結ぶっていうこともされて



と思います。

そういう中で、要は聞きたいですというふうには言わない形でずっと長期的な関係をつくっていく、その中で「神戸のことば」、すごく抽象的な物の言い方ですけど阪神・淡路の経験だったりとか、あとは防災とか減災とか、そういった言葉っていうので、何かこうどんな時にそういう言葉が出てきて、印象的な言葉とかはありますか。

■兵庫県立大学「ほっとKOBE」 私たちはおっしゃっていただいたように、本当に長期的にずっと関係を築いた上でぼろっと弱い部分をお話してくれるっていう方ばかりなので、出会って初めはもちろん無視されてましたし、ずっと挨拶ずっとし続けて、ある日突然笑顔になってくれたりとか、そういう経験をしてきました。

その中で、お話ししたい気持ちがあるのにできないっていう人が多くいらっしゃるっていうのをすごく思っていて、ほっとKOBEに来た時にそれを話してくれるようになったんですけど、お友達がいないっていう話を聞いたりと、ここに入居して半年以上たつのに誰ともまだしゃべったことがないっていうおばあさんもいらっしゃって、そういう方がここに来たら、誰かとしゃべれるのかなあっていうふうに聞いてくださった方がいらっしゃったので、話したい気持ちはあるけれども、そういうことがあって難し

いっていうのがすごくよく分かりました。

■高森研究員 印象的なこういう方がこの日こうやってきて、こういうお話をされましたっていうようなちょっとワンシーン、もしあれば、想像をしたいなと思うので、どんなことがありましたか。

■兵庫県立大学「ほっとKOBE」 さっきも少しでてきたおばあさんの話なんですけど、ずっとほっとKOBEの前には通りかかるけれども、なかなかお話ししないですし、こんにちわって話しても無視するか、ブツブツブツと暗いことを言っていて、下をうつむいて歩いていくっていう感じのおばあさんが、ある日突然ではないですけど、何回もお声がけしていくうちに明るい話題を話してくれるようになって、今までは人の悪口とか、そういうのをブツブツ言う方だったのが、今日は天気がいいねっていう、そういう明るい話題を言ってくれるようになって、それがすごく私の中では一番うれしい出来事で、今まではそういう表情を見たことがなかったので、良かったです。

■高森研究員 それが変わるっていうのは、どういうことがキープポイントというか、どうしてその人は変化することができたと思いますか。

■兵庫県立大学「ほっとKOBE」 災害、震災が起こって22年も経つけれども、全く違う環境に置かれてしまっ



て、ひとりぼっちでつらい日が続いてた中で、友達もいなくて、でも、孫くらいの若い世代、私たちはその人にとって孫の世代になるので、すごく多分、自分で言うのも何ですけど、かわいいんだと思うんですよ。

■高森研究員 そうでしょうね。

■兵庫県立大学「ほっとKOBE」 だから、そういう子に話しかけてもらって、おばあさんなので、男の子も好きですし、そういう若い人からぱっと声かけられたら、やっぱり最初は警戒してもやっぱりうれしいんだろなっていうのはすごく思います。

■高森研究員 そうですね。そう考えると、今、孫っていう言葉が出てきましたけど、やっぱり今震災から22年経とうとしていて、震災の時にぱりぱり働いていた30代、40代っていうのが50代、60代ですよ。もっと言えば、震災の時にリーダーとして、地域のリーダーとして活躍してきた人っていうのは大体50代の方々だったと思うんです。そうすると、50代の方々はまだ70代、80代になっていってるわけですよ。だから、そういう人たちとの、親戚関係のようなこういう関係を結べるのは、もしかしたら今しかできない形かもしれないですね。だから、娘だったり孫だったり、そういった子たちに伝えたいっていう思いっていうのは血縁関係を越えて伝承するための、何かこう無理のない関係性っていうものができような、そんなヒントをもらったような気がします。ありがとございます。

最後に、立命館大学の減災×学びプロジェクトのお話をちょっと聞きたいと思いますけれども、ここの活動は本当にあらゆる場所に行って、しかもみんな全員が行くというわけでもなく、本当に関心があったりとか、あとはそういったものに行ってきたてはみんなでミーティングをして、じゃあ我々にできることは何なのかということを考えていく、そういうものだったと思いますけれども、この神戸の話に今回は聞いてみたいと思うんですけど、立命館大学の活動の場合は「神戸のこぼれ」ということも大仁節子さんっていう写真集の話ですよ。大仁さんはもう5年前に亡くなられているので、お会いすることもできない。なおかつ、私もお会いしたことがないというそういう中で、会ったことがないけれども、写真集がある。少しだけでも文章がある。そういった中でまさに繰り出すっていうことをしてきたと思うんですけど、その中で、もうこのことは伝わったなと思ったことと、このことはまだわからないなってこと、ありますか。

■立命館大学「減災×学びプロジェクト」 昨年12月に1回定点観測を行ったんですけども、その時森南町の方に行って、大仁さんの実際のおうちがあったところを紹

介してもらったりして、やっぱり自分の発表の時にも紹介したんですけど、すごく大事だったおうちが全壊してしまって、それをどうしてもやっぱり写真に残しておきたいって思って写真を撮られたのが定点観測というか、御自宅を撮った最初のきっかけでもあったので、やっぱりそのおうちの周りの写真だったりとか、キャプションの写真についてる文章について何かすごいやっぱり思い出があって、やっぱりそういうのは伝わってきて、改めて大仁さんの御自宅の周辺とかをもう一回定点観測して、何かこんなにおうち、そのおうちも全然なくなってしまって、すごい変わってるのを見て、この時大仁さん、どう思ったんだろうなとか、そういうのを感じながら活動はしていました。

■高森研究員 今回、ちょっと定点観測に参加させてもらってるんですけど、初めて森南町の再開発を担当されていた元神戸職員さんの松本さんという方が同行してくださったんですよ。彼から語られる言葉っていうものは写真集で見ただけじゃない言葉があったと思うんですけど、やっぱり当時を知ってる人がいる、発表でも神戸を知ってる人がいることが大事だって話がありましたけど、やっぱり物だけでは難しいっていう感じはしますか。

■立命館大学「減災×学びプロジェクト」 そうですね、私自身は神戸の出身なので、その場所に行ったら、何か今ある風景とかをよく知っているの、あ、昔はこうだったんだなっていうのが分かったりするんですけど、やっぱり他のメンバーもみんなそれぞれ違う地域に住んでいる人ばかりなので、その方への今の風景も知らなかったりとか、昔のを見て、ああこう変わったんだなあみたいな感じたりして、私自身も震災当時の様子とかも、写真集見たりとか普通にニュースとかそういうので写真とか映像とかでしか見たことがなかったので、何か実際にその場所を知っている人に話を聞くことで、当時ここにこんなのがあってみたいな話が聞けた方がより身近に感じられるというか、それは思いました。

■高森研究員 なるほど。やっぱりこの話聞いてると、それはその他のところにも共通してたと思いますけど、やっぱり震災を経験していない我々が震災を知っている時に、熱心にずっと語りをされている方だったりとか、あとは映像に残している方とか、本当にたくさんの方がいるんだけれども、語らないけれども震災にことに関して思いのある人が実はたくさんいらっしゃるんですね。その思いっていうものも全然一様ではないわけですね。今回、この7グループの取り組みの中で、共通しているなと思うのは、この取り組みによって多分きっと初めてと、10年ぶりとか15年ぶりとか、そんな形で神戸の

話をした人がたくさんいたと思うんですね。我々自身が掘り起こしをするためのメディアになるというか、そういうふうになることはできるんじゃないかなということを何となく感じることができました。

鈴木さんが、今ずっと書いてきてくださったものを少し見ていただきながら、震災を体験していない我々が自分たちの同級生とか周りの人で災害とか防災とか、あとは神戸のことに関心がない人たちに何をどうやってどんなふうに伝えられるかということをちょっと考えてみたいと思います。

全体を見てみながら話をしていきたいと思うんですけど、少しまとめると、まず最初に、これは舞子高校さんのお話でしたね。その話の中では、商店街で何の連絡もなく、本当にアポなしで行ったら様々な話が聞けたということ。あとちょっと震災とは関係ないじゃないと思うけれども、すごく熱のこもった言葉があったということがすごくひっかりましたということがありました。あと、これは新長田、これは神戸学院さんですね、新長田で、この話は置いていって言いながら、ものすごく身体を使って話してくれた人たちもいたと。あと、やっぱりちょっと違うなというふうに、これは「ぼうさいマイCREDO」の関大生の子が言ってくれましたけれども、何かやっぱり東北よりましだよっていうような言葉で、もしかしたら片づけてしまうのかもしれないし、神戸のことを、じゃあそうだからもう語らないっていうようなものとして大きな災害っていうものがあるのかもしれないなということがわかってきました。

あと、その中では、またこれも「ぼうさいマイCREDO」さんですね。これは本当にもう一つ大事な点かもしれないんですけど、お一人お一人丁寧に聞くということはもちろん大事な上でなんだけれども、200人っていう多くの人に同じ形で聞き続けること、そういうふうにすることによって神戸っていうもののそのまちが持っている

震災観っていうのとか、震災に対する考え方というか感覚っていうものを、なかなか震災を経験してない人間にはわからないですよ。でも、こういう言葉でこういう語調でお話をされるんだっていうことを200人聞いていくことで体でわかっていく。これはこうでしたって表現するのはすごく難しいと思うんだけど、神戸を知ったというような実感を持ったことにもなるんじゃないかなというふうにも考えられるかもしれないですね。

あとは、D-PROの彼が言ってくれた、どうして防災に興味を持ったかっていうのは、やっぱりこれ、阪神・淡路じゃなくって東北の映像を見て、しかもこれがリアリティーがなくてというようなそういう部分と、あと学校の教育とていうのが結びついた時にこれをやろうというふうに関心が、要は1個のきっかけじゃないってことですよね。何個か重なりがあるっていうことが大事なのかなというふうなこともわかってきました。

あとは我々の役割として、今震災から22年ですので、その中で防災、防災第1世代っていったらどうなのかわからないですけども、震災当時50代、60代でばりばりまちづくりに頑張ってこられた方々、そして、その意思を継いで防災の研究者になったり、あとはそういった活動の先駆者になったりした人たち、そして、少しそこから離れて、私たちぐらいですかね、30代ぐらいと、あと10代、20代ってというようなそういう層の重なりができてるのが今だと思うんですね。層としてなおかつ今、阪神・淡路大震災でその当時第一線で活躍していた人たちとも話ができる、そんな時期でもあるということ。だからこそ、みんなで話し合える場が持てるっていうのは大きなことだし、この部分はすごく大切にしていかなきゃいけない点だというふうに思いました。

では、なかなかまとめるのは難しいんですけども、この1年間で色々な体験をしてきたと思います。その中で、もしかしたら一生ひっきり続ける体験もあったか



もしれません。そんな中で、じゃあ自分の体験を自分のお友達に、友人です、同級生の友人に神戸の体験ってどうやって分かるんっていうふうに言われた時に、こういうことをしたらいい、こういうところでこういう話聞いたらいいよとか、こういうことをやってみたらいいよとか、まずはこれを読んだらいいよとか、何かこうどんなことでもいいので、言葉が出てきたらうれしいんですが。最後のあと5分ぐらいなんですけど、何かありますでしょうか。多分、色々もう出てきてると思うんですけども。難しいですか。

■立命館大学「減災×学びプロジェクト」 震災が別に神戸だけじゃなくて、今も熊本の地震とかもあったりして、結構若い世代の人も震災に関してすごい興味を持ってる人はすごい多いと思うので、神戸の震災はやっぱり最初というか、一度この神戸のこういうことがあって、今は何か若い人はこういう活動をしてるって何か紹介するとか、もっと神戸の人にも、神戸の若い人にも知ってほしいし、私は京都の大学なので、他の地域の方とかにも知ってもらえたらいいのかなと思っています。

■高森研究員 なるほど。

■国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 3年生 今の震災未経験世代は、やっぱり命のとうとさみたいなのを理解してないなと思ひまして、ゲームは例えば小学生とかだったら、嫌いな友人とかにおまえ死ねとか言ってますけど、死ぬっていう言葉にどれだけの重みがあるのかっていうのを理解してませんし、ただ経験してないからあんまり理解できないっていうふうに思ひまして、ただ、それは私自身もそうだと思うんですけど、なので、やっぱり命の尊さっていうのを震災を経験された方の体験談から感じとっていくような形はとっていかないとけないなと思ひます。

■高森研究員 ありがとうございます。神戸学院大学さんはどうですか。どんなことを知ってもらったら、どんなことを知ってもらったら防災とか減災とか神戸とかに関心がない人も、あ、こういうことって大事だなとか、もっと聞きたいなっていう思いになることができるでしょうか。

■神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ 神戸に限らずになるかもしれないんですけど、さっき私が思いついたのが、復興したまちでおいしいものを食べてもらう。仮に私の近所に住んでる友達に、震災のこと知りたいんだけどどうすればいいって言われた時に、私はまず最初に多分言うのは、復興したまちでおいしいものを食べに行って、そこの人に震災の話を聞くのはどうって提案するかなって思ひて、そしたら、何か震災は暗いだけのイメージではいてほしくないの、今頑張ってる人たち

の笑顔とかを見て、震災に対してもう少し明るく、今は頑張ってる神戸っていうのを同世代に伝えられるかなって思ひました。

■高森研究員 ありがとうございます。本当に話は尽きない中で、どこまで話が進められたかっていうのはあるんですけども、本当に今回15分間の話の中では決して出てこなかった、ちょっと発表にはできない、でもすごく大事なことっていうものが数々出てきたと思ひます。

この内容に関しましては、今後インターネットでも公開することになってます。なおかつこれは10年続く中の第2回目ということですので、3回目、4回目とこうやって続けていながら、これを蓄積していきまして、じゃあどういう形で神戸の経験っていうものを震災を経験していない者たちが伝えられるのかということのヒントを、こうやって毎年考える場ができればなというふうに思ひております。

どうもありがとうございました。



集める・伝える・活かす

2017年1月7日

ファシリター

高森 順子 氏

災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION2017



KOBEのことば 公開サロン

一番印象に残った事は?

どうして活動に参加したの?

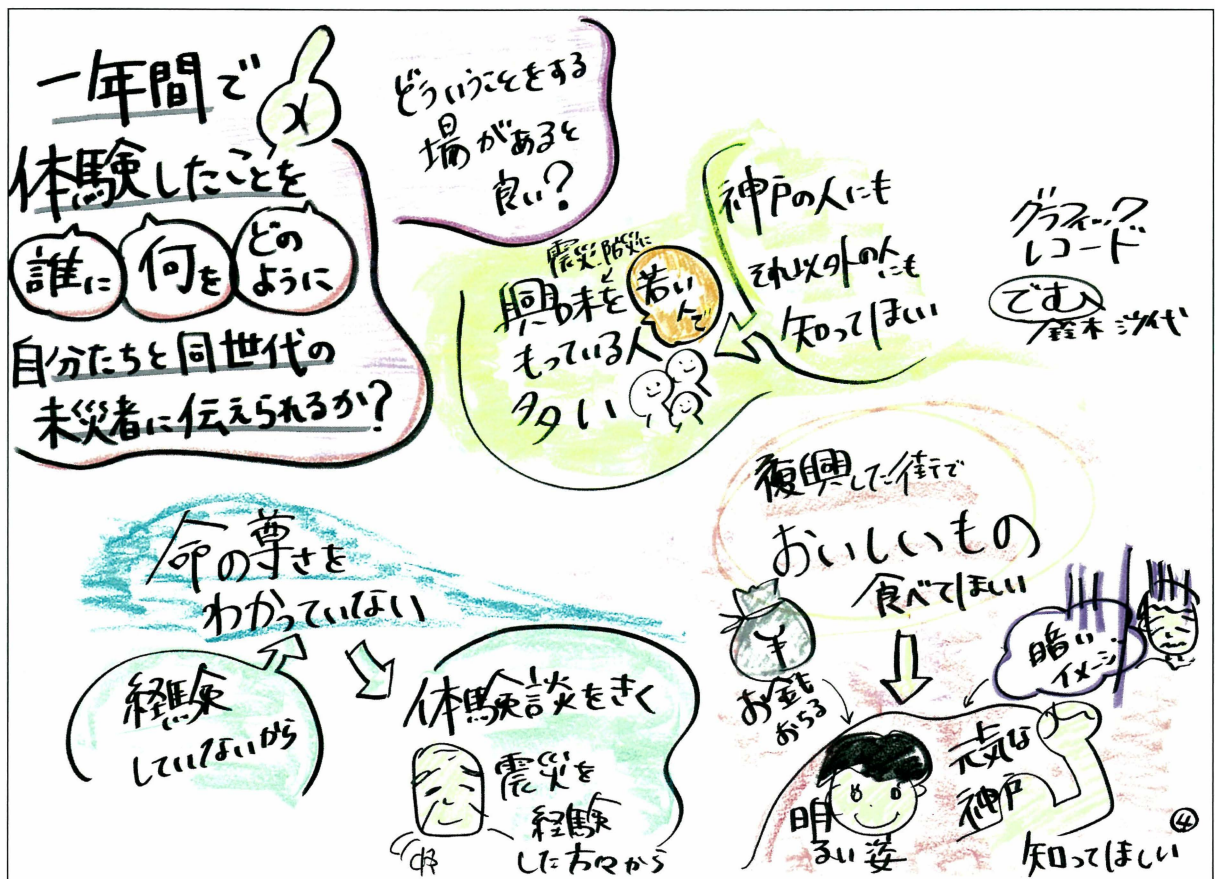
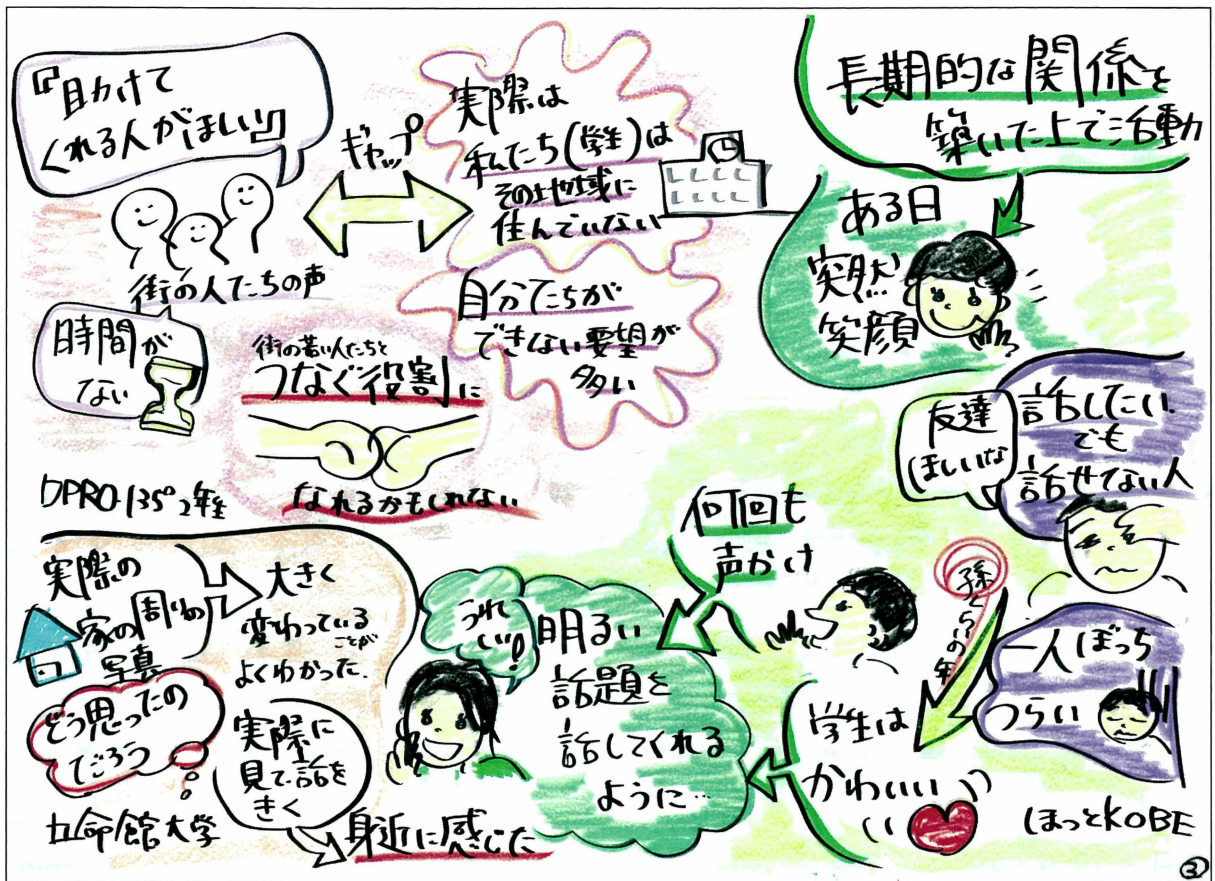
0600
0700
0800
0900
1000
1100
1200
1300
1400
1500
1600
1700
1800
1900
2000
2100
2200
2300
2400

新長田
身ぶり手ぶりで話して
話はおいて
えび
海沿いにあるのに津波をあまり意識してない
魚
おじいちゃん
食って寒さ
かばいから
今の子どもは弱い
舞子
高校

ネガティブな事を言う人も含めて「東日本」って
経験されたからって
阪神の震災向かい

未災者が伝えられること

200人くらいの人
1人ひとりが
過去の
今の心構え
思っていること
ある
ぼうさいマイ Credo
神戸の街としての感覚
阪神地区
ように
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100



閉会のあいさつ



河田センター長

ただいま御紹介にあずかりました河田でございます。

阪神・淡路大震災が発生した、今から22年前、私は48歳でした。だから、今年70歳になりました。第1世代になるわけですが、実は第1回のメモリアル・コンファレンス・イン神戸を、神戸国際会議場で開催しました。というのは、ここ「人と防災未来センター」がある場所は当時、野原でしたから、何もなかったんです。

このメモリアル・コンファレンス・イン神戸は少なくとも自分たちの責任で10年間はやろうということを決めました。しかし、実は当時、お金が一銭もありませんでした。そこで、色々な学会や、企業から運営のための資金のご協力を頂き、2005年までの10年間、実施してまいりました。

私たちは10年たったら、この会議は次の世代に渡そうと考え、10年経った時に、矢守先生や牧先生たちに引き継ぎ、以後22年やってきたわけでありました。

2002年に、この人と防災未来センターという建物ができ、そして、今日のような会合を定期的にここで開催することができるようになりました。その当時ですら、今日、皆様方がやっていたような内容のミーティングが将来行われるというようなことの予測はできませんでした。

私が皆さんの発表を聞いていて思ったことは、防災というのは私たちが思っている生活文化をどのようにして変えなきゃいけないかということにつながるんだということ。つまり、いろんな体験とか教訓を言葉でどう伝えるかというのは、文化を変えるということにとっても大切なことなんだということに気がきました。

コミュニケーションの大切さとして、これは実際に体験しようとしてまいり、ということではなくて、自分の文化になっているものを人の違う文化の中にしみこませるということの難しさこそが、防災だと思うのです。

災害は、ほとんどの方は一生の間に一度も経験しないので、その大切さというのはなかなかわからない。生活文化の中に命の大切さ、生きていくことの大切さをこの防災ということを通して知っていただく、この手段として昨年からはまったこの「神戸のこぼ」が果たす役割は非常に大きいと思います。

最近では本当に忘れる暇もないぐらいに、全国各地で災害が起っています。地震だけではなくて地球の温暖化によって大雨が降ったり、今まで上陸したことのないところに台風が上陸するということが日常茶飯事で起こるようになりました。

そのため、防災というものを私たちが持っている生活文化の中にどのようにしてしみこませていくのかということがとても大事だと思います。

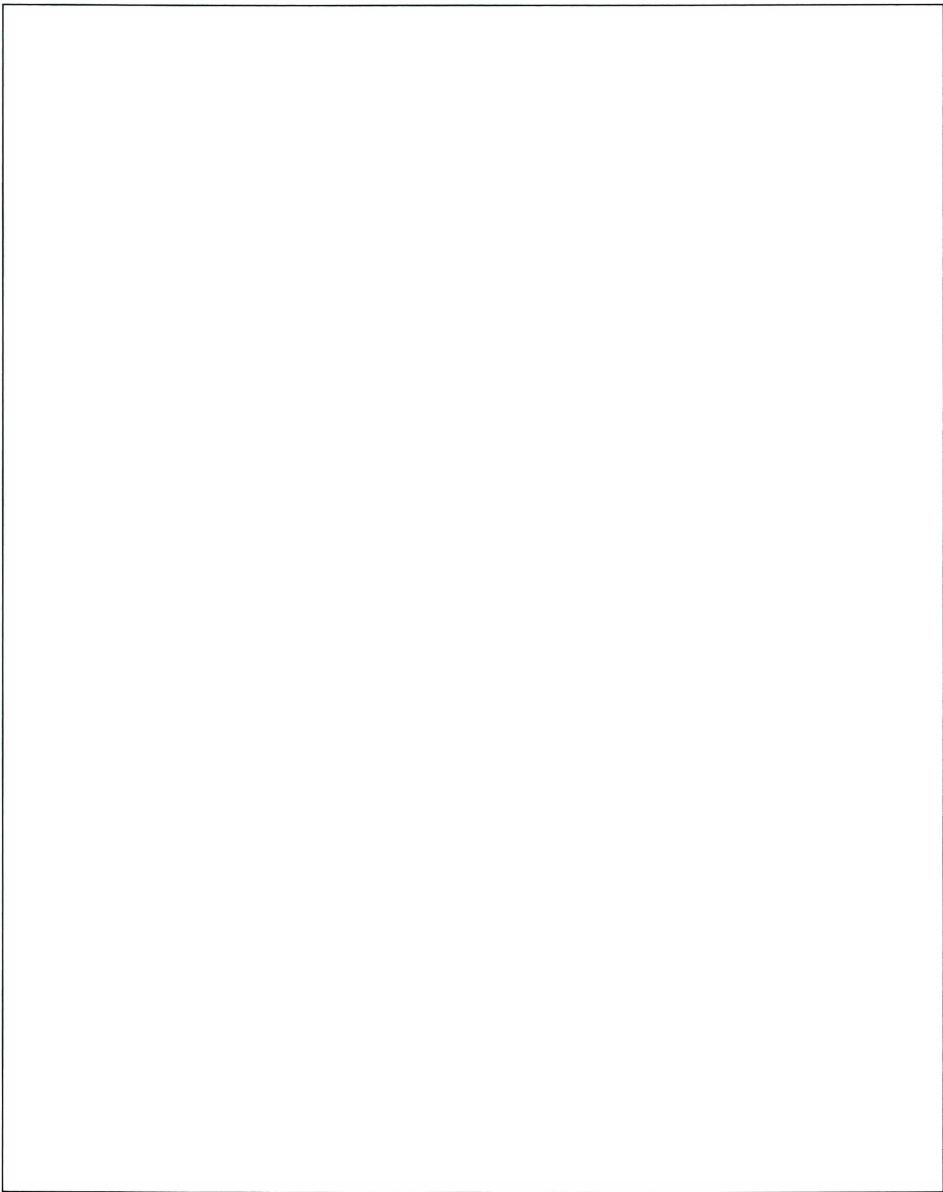
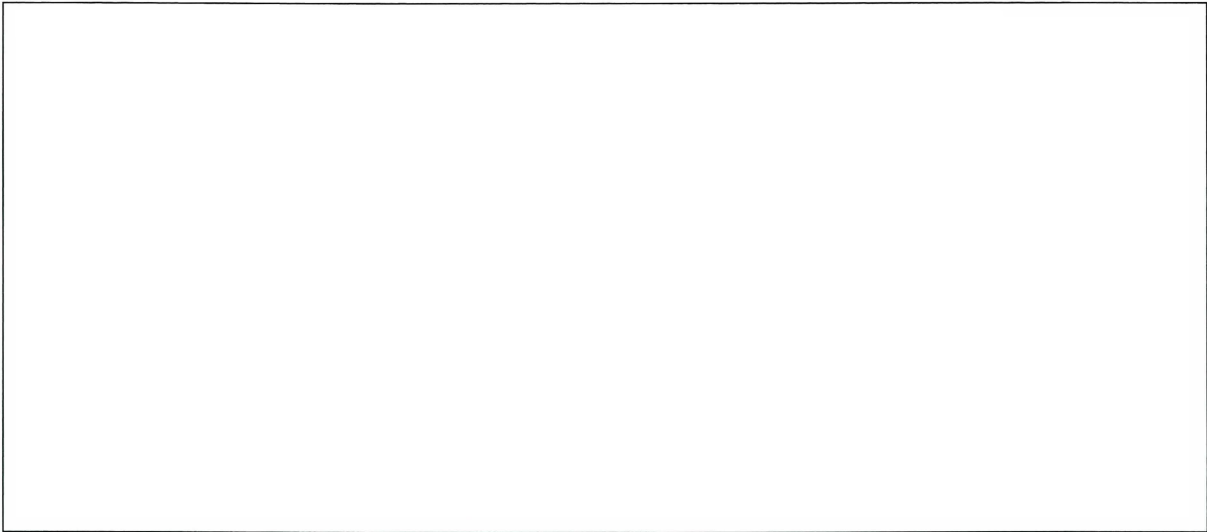
実は二日前に私は仙台に行っていました。東北大学にはこの東日本大震災のきっかけで災害科学国際研究所という非常に大きな組織ができました。ここで、東北で起こった災害の教訓をまとめてどう発信するかという作業をやっているのですが、私たちが神戸でこれまでやってきた皆様方が参加する被災地での被災者からのアクションというものが、残念ながら東日本大震災では高台移転という形でもともと住んでいたところに住まないという形でコミュニティが全く潰れてしまっている中で、この東日本大震災の教訓を私たちのようなこの活動と同じような形でどう伝えていただくのかということは大変難しいという現実を見てまいりました。

私たちはもちろん被災地でこういう活動をこれからも続けていただく必要があると同時に、そういうことが非常に難しい状況にある被災地でも我が国にはたくさんあるということで、この輪を広げていただくネットワークを作ってもっとほかの地域、被災地でそれを芽生えさせていただく努力もお願いしたいと思います。

阪神・淡路大震災の発生から22年を経て、こういう形で若者と集って、私たちのような経験者が次につなげるような努力をどうしていったらいいかを改めて考えるという機会に私自身が置かれているということは、大変幸せに思います。

人と防災未来センターができてから、今年で16年になりますが、世界の防災実務機関として非常に大きな力を持つようになりました。今、我が国でも南海トラフ巨大地震あるいは首都直下地震のことが非常に大きな問題になっています。色々なものが東京をはじめ都市部への過度の一極集中で、その反面、地方の衰退が起り、コミュニティが崩壊しているという中で、災害がどんどん起こるようになっていきます。その中で、皆様方のこの活動がそれにつながっているという思いはしっかりと私自身も感じていますし、ぜひ来年、再来年も、この「神戸のこぼ」を中心に活動していくことは、とても大事なことだと思います。本日は、本当にありがとうございました。





集める・伝える・活かす

災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2017

KOBÉのことば

参加無料

活動報告会

日時

2017.1.7 [SAT]
10:00 → 13:00

会場

阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター

これまで、「阪神・淡路大震災」を経験した世代が教訓と提言をまとめた「メモリアルコンファレンス・イン神戸（1996～2005年）」、そして、その教訓を次世代に伝えるために「災害メモリアルKOBÉ（2006～2015年）」を実施してきました。

そして、2015年度からこの先の10年を見据え、「災害メモリアルアクションKOBÉ」という取り組みを開始しました。

参加学生の防災・減災活動を通じて、災害教訓を「活かす」ことができる人材を育成するとともに、防災の取り組みをいろいろな地域・世代へ広げていく事例をまとめ、今後の被害を減らすことに寄与することを目指します。

主催：人と防災未来センター、京都大学防災研究所
共催：京都大学防災研究所自然災害研究協議会
企画：災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会
後援：兵庫県教育委員会/神戸市/神戸市教育委員会/朝日新聞社/読売新聞神戸総局/毎日新聞神戸支局/産経新聞神戸総局/神戸新聞社/NHK神戸放送局/ラジオ関西/神戸学院大学/明石工業高等専門学校/関西大学社会安全学部/立命館大学サービスラーニングセンター

プログラム

司会：松蔭高等学校 放送部

10:00

開会挨拶

災害メモリアルアクションKOBÉ 企画委員会委員長
人と防災未来センター 震災資料研究主幹
京都大学防災研究所教授 牧 紀男

10:10

活動発表

発表：①兵庫県立舞子高校
②国立明石工業高等専門学校 D-PRO135*
（明石高専防災団）2年生チーム
③国立明石工業高等専門学校 D-PRO135*
（明石高専防災団）3年生チーム
④関西大学社会安全学部 近藤研究室
「ぼうさいマイCREDO」共有プロジェクト
⑤神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
⑥兵庫県立大学「ほっとKOBÉ」
⑦立命館大学「減災×学びプロジェクト」

12:05

公開サロン

「未災者が伝えられること」

この活動で印象に残った経験を参加学生同士で共有し、自分たちと同世代の若者に対して「KOBÉのことば」をどのように伝えることができるか意見交換します。

ファシリテーター：ひょうご震災記念21世紀研究機構
研究調査本部 研究員 高森 順子
グラフィックリーダー：京都産業大学教育支援研究開発センター
鈴木 沙代
サロン参加者：参加団体の学生等（当日参加している方々全員）

12:55

講評・閉会挨拶

災害メモリアルアクションKOBÉ 企画委員会顧問
人と防災未来センター長 河田 恵昭

※敬称略



災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2017

兵庫県立舞子高校



私達は次の災害でその人にとって最良の判断ができるための活動を行っています。最良の判断とは災害で死なないことではなく、後にその人が後悔をしないことだと捉えています。私達の「KOBÉのことは」は二つあり、一つめはヒアリングで聞いた生の声。二つめは生の声を聞き、私達を感じたことです。この二つを大切に、危機感をもってもらうことを目的として発信します。

関西大学 社会安全学部 近藤研究室 「ぼうさいマイCREDO」共有プロジェクト



防災の分野は、「あぶない」、「足りない」、「難しい」といった、“後ろ向きな”ことばのオンパレードです。これではちょっと息苦しい。そこで、関西大学近藤ゼミでは、「ぼうさいマイCREDO」(クレドは、ラテン語で「約束」という意味)を集めるといふ、KOBÉ発のプロジェクトを始めました。各地で様々なメディアを活用して、希望を紡ぐ“前向きな”ことばを共有しています。

神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ 「阪神・淡路大震災の教訓って、伝わってる？」



阪神・淡路大震災から22年。東日本、熊本など大震災が頻発し、教訓が伝えられてきた。なのに、犠牲者は減らない。なぜ？ 大学生たちに芽生えた疑問。中学生に、体験した街の人に聞いてみよう。私たちの言葉で災害の教訓を考えよう。3年ゼミ長の田中曜さんは「各地の災害現場に行き、なんかモヤモヤとしていた。未災者の私たちが体験者から受け止めて、私たちの言葉で次の世代に伝えて行きたい」と話す。

立命館大学「減災×学びプロジェクト」



私達は、震災があった神戸・熊本・新潟・東北・熊本など様々な地域で活動してきました。実際に地域の方々と関わり、その現状を自分達の目で見ると、地域ごとに必要なものはなにかを考えていきました。地域に合わせた様々な活動の仕方において、「減災」について多様な側面から考えており、また防災や減災に活かしてもらえるように活動で得た経験や知識を伝えていくこともしています。

KOBÉのことは

「KOBÉ」とは、阪神・淡路大震災の被災地全体と、災害の影響を受けたひと、そして災害後まちのために活動したひと、すべてを表現しています。災害メモリアルアクションKOBÉでは大震災を直接経験していない若い世代の人たちが、災害を経験した人々へのインタビュー、アンケート、交流事業などを企画・活動し、「KOBÉのことは」を集めます。そして、わたしたちのこれからのために、「KOBÉのことは」から何を残し、伝えていくべきか考えながら、「学ぶ・活かす・拡げる」取り組みをします。1月に開催するシンポジウムでは、その内容を報告するとともに、「過去・いま・未来」を見据えたアクションのありかたについて、みんなで考えを深めていきます。

国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (明石高専防災団)



D-PRO135°(明石高専防災団)は、明石高専で防災士の資格を持っている学生の有志の集まりです。現在、2年生チーム、3年生チームが別々の活動をしています。

2年生チームは明石市二見町東二見地区において、「東二見地区減災プロジェクト」を行っています。先日は町の方々と一緒にまち歩きを行い、ハザードマップを作成しました。今後は、このハザードマップを用いたハザードシートの完成を目標として活動していきます。

3年生チームは、遊ぶだけで防災の知識が身につく防災ゲームの製作を行っています。昨年度製作したゲームをベースに、現在は新しいゲームを開発中です。新ゲームは、学習性、リアリティ、ゲーム性を向上させており、「共助」をテーマにしています。また、「防災クイズ」として阪神・淡路大震災の被災体験を組み込んでいます。

兵庫県立大学「ほっとKOBÉ」



ほっとKOBÉは、HAT神戸の地域コミュニティ形成の支援を目的とした活動です。小さい子どもから高齢者まで、幅広い世代の誰もが気軽に集え、「ほっと」できる場所を提供しています。大学生が運営し、世代間の橋渡しをする役割を担っています。普段の活動に加え、イベント等も行い、より多くの住民さんに利用してもらえるよう努めています。学生がHAT神戸の地域に密着し、継続した活動を行っています。

お問い合わせ：

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター事業部普及課
〒651-0073 神戸市中央区臨海町1丁目5-2 西館6階
Tel：078-262-5060 Fax：078-262-5082
Email：hitobou-fukyuuka@dri.ne.jp
HP：http://www.dri.ne.jp/memorial_action_kobe

本研究は京都大学防災研究所共同研究(平成28年度一般研究委員会28K-02)の成果に成果によるものです。

災害メモリアルアクションK0BE企画委員会名簿

【企画委員】

※委員は氏名五十音順

役 職	氏 名	所 属
企画委員長	牧 紀男	京都大学防災研究所
委 員	伊藤亜都子	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	ト部 兼慎	NPO法人防災デザイン研究会
	太田 敏一	国立明石工業高等専門学校
	奥村与志弘	京都大学地球環境学堂地震災害リスク論分野工学研究科
	甲斐聡一郎	兵庫県災害医療センター
	河田のどか	(特非)さくらネット
	近藤 誠司	関西大学社会安全学部
	高森 順子	大阪大学大学院、阪神大震災を記録し続ける会
	中野 元太	京都大学情報学研究科博士後期課程
	西口 正史	ラジオ関西報道制作部 記者
	福岡 龍史	エフエム・プランニング
	宮本 匠	兵庫県立大学防災教育研究センター
	安富 信	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	横山 愛子	株式会社GK京都
	和田 茂	兵庫県立舞子高校

【サポーター】

	越山 健治	関西大学社会安全学部
	諏訪 清二	兵庫県立松陽高校
	佐藤 敬	国土交通省近畿地方整備局神戸港湾事務所
	馬場美智子	兵庫県立大学防災教育研究センター
	細川 顕司	(公財)市民防災研究所
	松元 正博	NPO法人『人・家・街 安全支援機構』
	矢守 克也	京都大学防災研究所

【顧問】

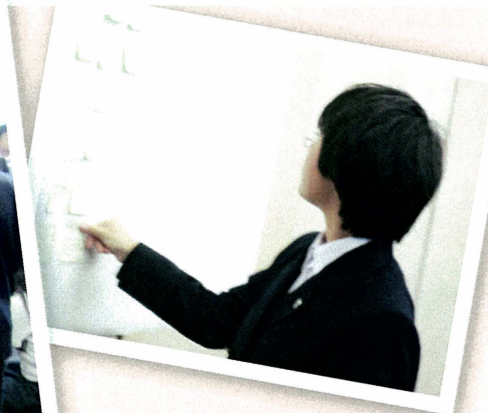
	河田 恵昭	人と防災未来センター、関西大学
	土岐 憲三	立命館大学
	新野幸次郎	神戸都市問題研究所
	林 春男	防災科学技術研究所

災害メモリアルアクションK0BE2017参加学生名簿

※順不同

グループ名	氏 名	所 属
兵庫県立舞子高等学校	山本 泰成	兵庫県立舞子高等学校
	井手口健司	兵庫県立舞子高等学校
	新山 琴音	兵庫県立舞子高等学校
	山本 千智	兵庫県立舞子高等学校
	松本 美砂	兵庫県立舞子高等学校
	三井 唯菜	兵庫県立舞子高等学校
	大坪 直人	兵庫県立舞子高等学校
	加藤 昌也	兵庫県立舞子高等学校
	住吉 悠	兵庫県立舞子高等学校
	西尾ことり	兵庫県立舞子高等学校
国立明石工業高等専門学校 D-PR0135*(明石高専防災団) 2年生チーム	竹谷 夏葵	国立明石工業高等専門学校
	松田 もも	国立明石工業高等専門学校
	樹下 晴香	国立明石工業高等専門学校
	北尾 匠	国立明石工業高等専門学校
	多胡 旭	国立明石工業高等専門学校
	谷郷 風人	国立明石工業高等専門学校
	河内山悠介	国立明石工業高等専門学校
国立明石工業高等専門学校 D-PR0135*(明石高専防災団) 3年生チーム	渡部桂太郎	国立明石工業高等専門学校
	東條 翔	国立明石工業高等専門学校
	松尾 彰太	国立明石工業高等専門学校
	多田 裕亮	国立明石工業高等専門学校
	菅 智子	国立明石工業高等専門学校
	松家 雅大	国立明石工業高等専門学校
	神足 美友	国立明石工業高等専門学校
	松本 拓実	国立明石工業高等専門学校
	村岡 荘志	国立明石工業高等専門学校
	篠原 達也	国立明石工業高等専門学校
	木村 真悠	国立明石工業高等専門学校
	中谷実穂子	国立明石工業高等専門学校
	今井 美佑	国立明石工業高等専門学校
	尾崎 杏奈	関西大学社会安全学部
関西大学社会安全学部 近藤研究室 「ぼうさいマイCREDO」	芥田 慶祐	関西大学社会安全学部
	上田 清加	関西大学社会安全学部
	折田 彩夏	関西大学社会安全学部
	細川紗里衣	関西大学社会安全学部
	田中 瞳	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
神戸学院大学現代社会学部 社会防災学科安富ゼミ	喜田悠太郎	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	沖代 大知	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	木ノ下敦也	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	塚本真央子	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	富岡 美祈	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	仲上 芽花	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	菅原 由衣	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	井上 太賀	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	大家 元希	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	南木 颯人	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	向田 健司	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	綾部 勇太	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	和田 貴士	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	山村 勇貴	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	一之瀬美希	兵庫県立大学
兵庫県立大学「ほっとK0BE」	叶 諒太	兵庫県立大学
	小谷 美尋	兵庫県立大学
	嶋谷 優衣	立命館大学法学部
立命館大学 「減災×学びプロジェクト」	飯田 雄平	立命館大学映像学部
	齋藤 光	立命館大学法学部
	芳野 尚吾	立命館大学文学部
	関 優花	立命館大学法学部
司 会	岩崎 奈々	松蔭高等学校2年
	磯見 京香	松蔭高等学校1年

交流会・発表風景等





災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION

平成28年度 災害メモリアルアクションKOBÉ 報告書

主 催：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
京都大学防災研究所

共 催：京都大学防災研究所自然災害研究協議会

企 画：災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会

人と防災未来センター 事業部普及課内

災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2 西館6階

Tel：078-262-5060 Fax：078-262-5082

http://www.dri.ne.jp/memorial_action_kobe

本研究は京都大学防災研究所共同研究（平成28年度一般研究集会28K-02）の成果によるものです